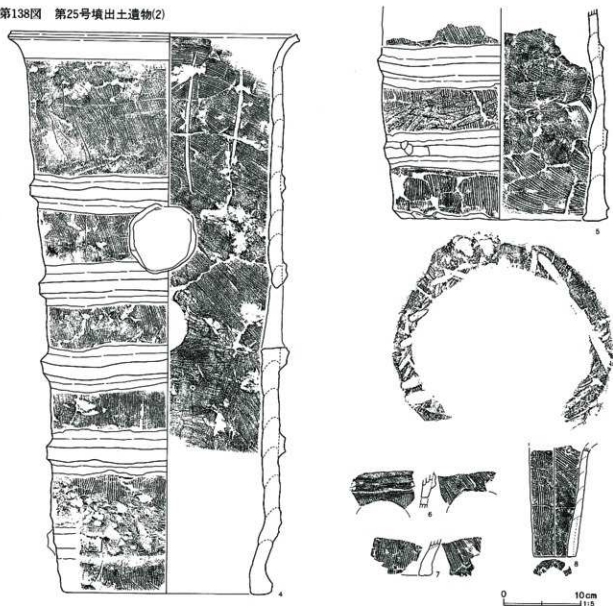


第138図 第25号墳出土遺物(2)



第25号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	埴	11.3	5.2		BEI	A	淡褐	90	赤彩
2	紡錘車								外径4.7 孔径0.75 厚さ1.85cm

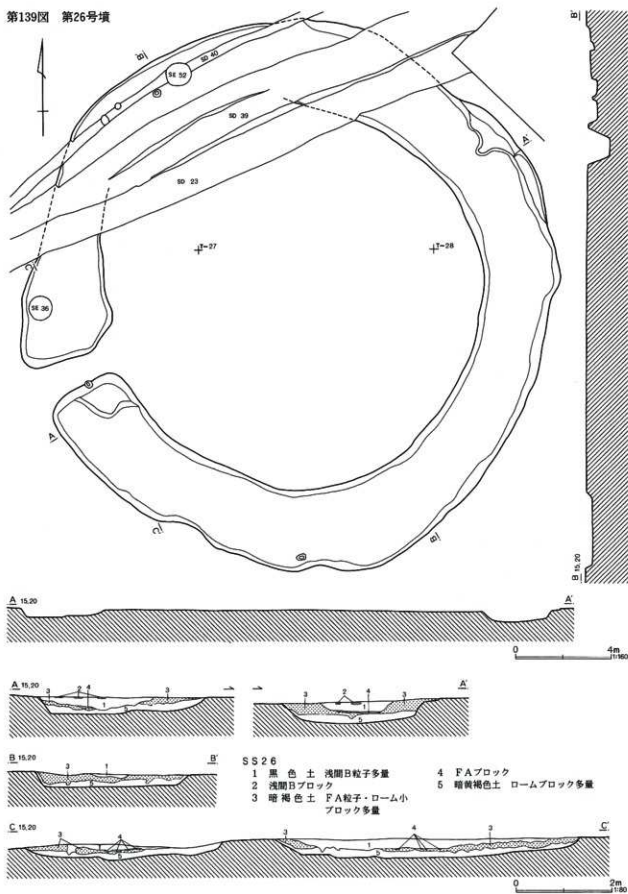
なっていた。5の大型円筒埴輪の下半部に復元され、底径28.6cm、残存高27.9cmを測る。大きさは3・4と遜色がなく、本来は5条突帯と考えられる。2段目外面には指撫てによる補修痕が顕著である。突帯には目の粗い布の圧痕が残る(図版131)。

胎土は赤色・白色粒子を含み、焼成は全体に良好である。色調は赤褐色を呈し、基底部は幅7cmほどの2枚の粘土板を貼り合わせて成形する。これらは器形等

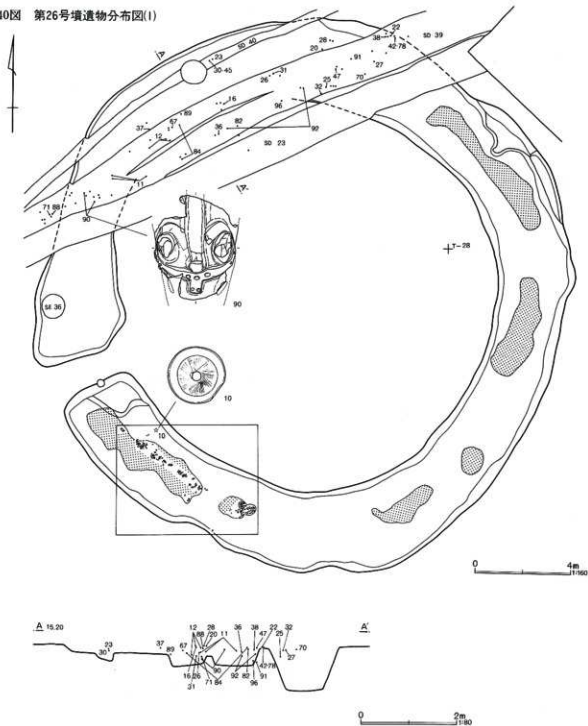
の特徴から生出塚遺跡I期の大型円筒埴輪に位置づけられる。その性格については、調査中埴輪片に意図的な配列状況が窺われたため、床面に埴輪片を敷き詰め遺体を置いただけの簡略化された埋葬施設の可能性を考えたが、周囲に明確な掘り込みがなく、現状では埋葬施設と判断するには難しいものと思われる。

推測ではあるが、埴輪製作遺跡である生出塚遺跡を背後にひかえ、失敗品を何らかの目的で意図的に廃棄

第139図 第26号墳



第140図 第26号墳遺物分布図(1)



したものと想定しておきたい。しかし、本来首長墓クラスの大型古墳に限定して供給されている大型円筒埴輪だけを選別して、この場所に廃棄したのか、さらにはこの古墳との関連性など不明な点が多い。

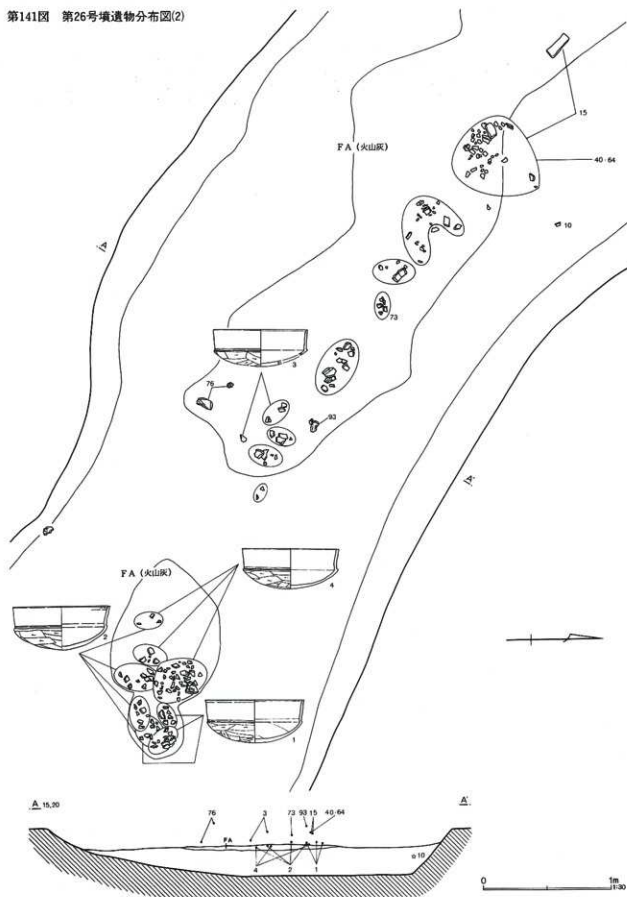
他に周溝覆土内から6・7の2条突帯の円筒埴輪片と8の形象埴輪片が出土している。8は小型であることから犬や猪等の小動物の脚部であろう。底面に板押

圧調整を施し、切開再接合成形と考えられる。

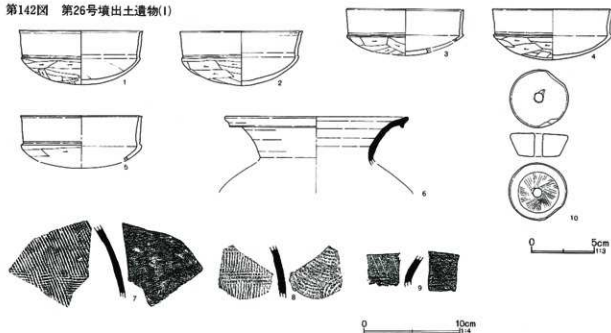
第26号墳 (第139~146図)

調査区北側低位面のR~T-26~28グリッドを中心に位置する。周囲には北に第25号墳、西に第38号墳、南に第30号墳が隣接する。また前回調査したB区第16号墳とは東側へ約8mの距離を隔てていた。南西に向くブリッジをもつ周溝内径16.64m、周溝外径

第141图 第26号墳遺物分布图(2)



第142図 第26号墳出土遺物(1)



第26号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	13.0	5.7		A B E F	A	橙褐	70	
2	環	12.9	5.7		A B E F	A	橙褐	90	
3	環	12.3	4.9		B E F	A	橙褐	80	
4	環	12.6	5.3		A B E F	A	橙褐	80	
5	環	(12.8)	4.8		B E F	A	橙褐	30	
6	甃	(19.4)	(5.0)		B G	A	灰	15	
7	甃				B G	A	灰		
8	甃				B G	A	暗灰		
9	甃				B G	A	灰白		
10	紡錘車								外径4.6 孔径0.7 厚さ1.8cm

23.6mの円墳である。墳丘の規模は第35・40号墳に次いで3番目に大きなものである。墳丘部の北側は東西に走る第23・39・40号溝によって大きく壊されている。

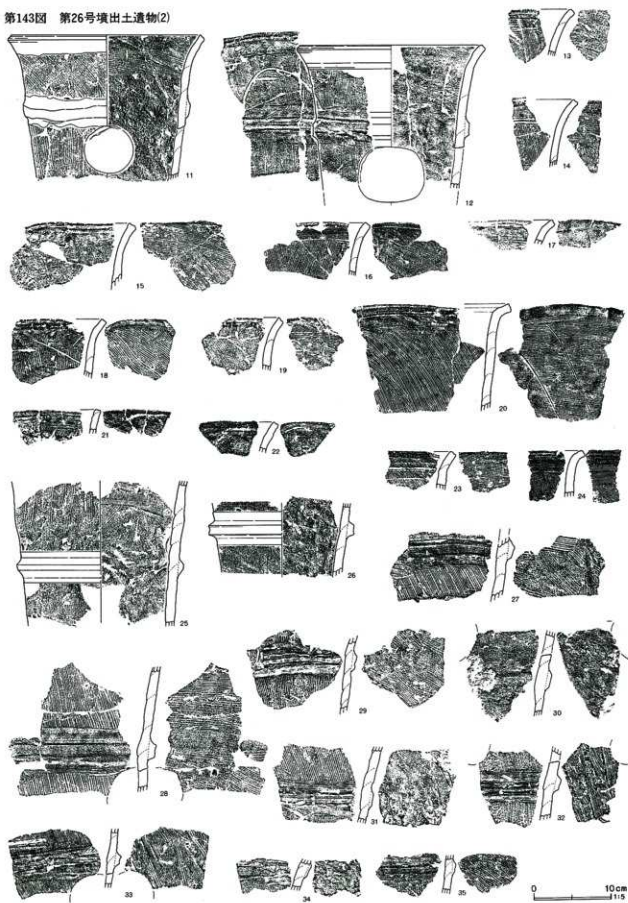
墳丘部の平面形態はやや歪んだ円形を呈する。周溝はブリッジの反対側にテラス部分を作り出しているほかは、全体に幅広く巡り、周溝幅3.71~2.88m、深さ0.48mを測る。周溝底面は概ね平坦で、ブリッジ右脇にステップ状に地山が掘り残されていた。これは周溝掘削作業時における足場の可能性も考えられる。周溝の立ち上がりは全体に緩やかで、外側が急角度で立ち上がる。ブリッジは墳丘側では直線的であるが、周溝外縁部で幅を広げ、主軸方向はN-109°Wを指す。

周溝覆土は大きく5層に区分される。最下層にはロ

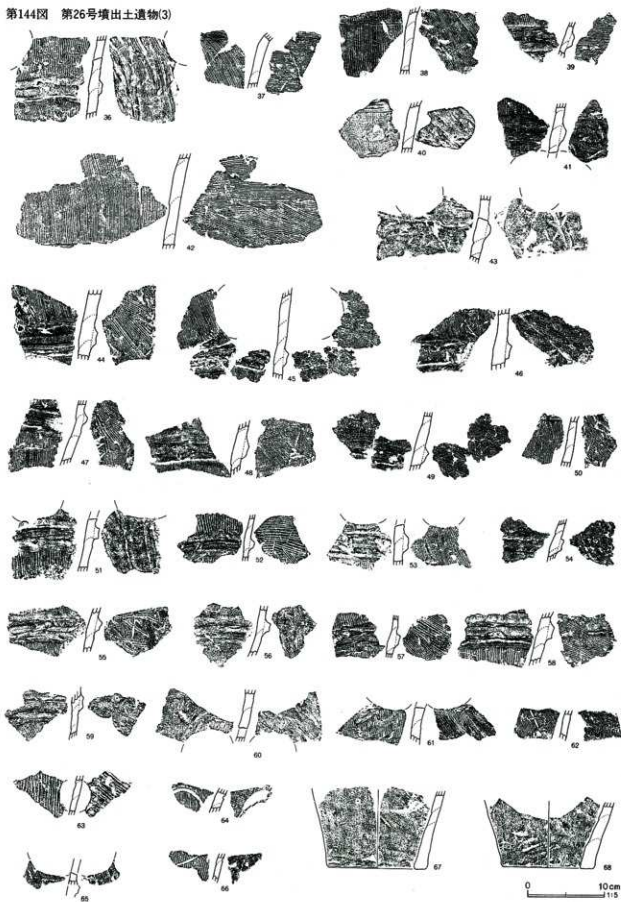
ームブロックを多量に含む暗黄褐色土が薄く堆積していた。この層からは遺物がほとんど出土していない。その直上を覆うようにFA純層(第4層)及び、FA混入土(第3層)がレンズ状に堆積していた。後世の溝によって壊されていた北側周溝部分を除いて周溝内部にはFAが島状に分布していた。このように周溝底面に近い位置にFA層が堆積していることから、築造時期はFAの降下時期にきわめて近い限定された時期であったと推定される。

遺物は、ブリッジの右側から破砕された状態の土師器環4点と滑石製紡錘車1点が出土した。また北側の周溝部分からは、重複する第23・39号溝の覆土を中心に土師器、須恵器、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬・家等)が出土している。

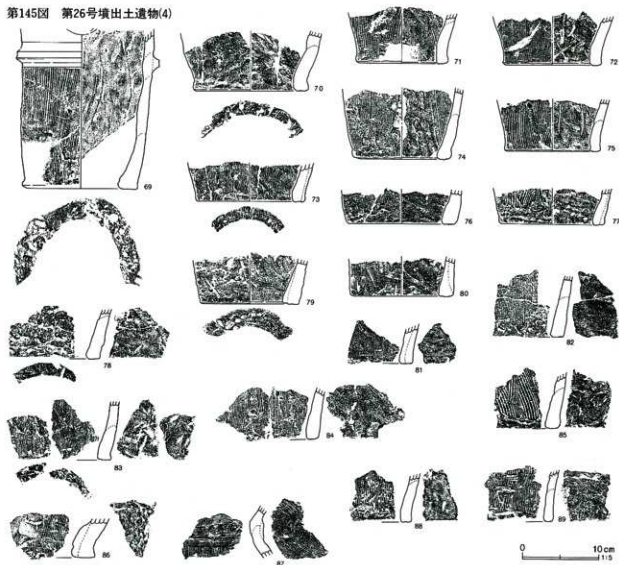
第143图 第26号出土物(2)



第144图 第26号填出土遺物(3)



第145図 第26号墳出土遺物(4)



第142図1～4の模倣杯は、ブリッジの右側からFAの混入土に混じて検出された。1・2・4は帯状に分布した遺物分布範囲の南端からまとまって出土し、いずれも細片になるまで破砕されていた。3は少し離れた位置から溝底面からやや浮いた状態で出土している。他の古墳の場合、完形の杯を1個ないし3個程度周溝内に置いていることが多いのに対して、本古墳では土器の破砕行為が行われており、葬送儀礼における祭祀形態の多様性が認められる。同様の供献土器の破砕行為は第35号墳でも確認されている。

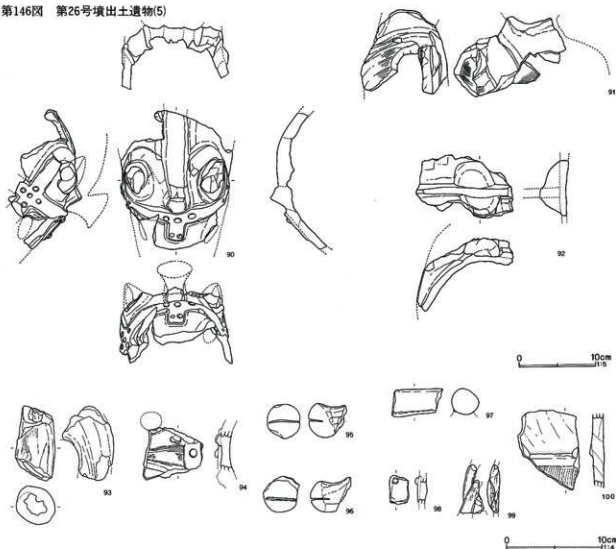
10の紡錘車はブリッジ右脇の墳丘裾から出土した。周溝底面から15cmほど浮いていた。下面に放射状の擦痕が見られ、端面に一部自然面の凹みを残す。

他に6～9の須恵器は第23・39号溝の覆土から出土しているため、確実に古墳に伴うものと断定はできない。6の甕はB区第15号墳出土例に類似している。

埴輪は周溝北側とブリッジ南側に集中し、周溝東側からは僅かに出土しただけである。いずれも墳丘部から転落しており、原位置を示すものは確認されなかった。

円筒埴輪は全体像の判るものはないが、2条突帯が主体を占めるものと推定される。口径は11か²24.8cm、12か²23.8cmである。底径は11.8～15.2cmと幅があり、平均で13.3cmを測る。器高は全体が判るものがなく不明であるが、最下段幅が69で17.5cm、最上段幅が10.2～11.0cmを測る。他に多条突帯の大型円筒埴輪の

第146図 第26号墳出土遺物(5)



破片(20・24・27・28・37・42・44・46・48)が少量含まれていた。朝顔形埴輪と確定できるものは87の頸部片のみである。色調は乳白色、淡褐色、橙褐色、赤褐色のものが見られる。乳白色系のものが主流を占め、大型円筒は赤褐色系が多い。外面調整の特徴として11のように口縁部外面に斜めハケを施すものがある。

ヘラ記号は12・18・20・31・38・56・62・64・66に確認された。いずれも部分的で全体の判るものは少ないが、12のように逆U字形のものと、×印があり、口縁部外面に施すものが多い。内面に施した例として大型円筒の20に縦位の細線刻が2本認められた。

形象埴輪の種類には人物・馬・家等が確認されている。築造当初の樹立位置を復元することは難しいが、大半がブリッジ北側の周溝内から検出されていること

からすれば、他の古墳と同様に墳丘北側を中心に形象埴輪が樹立されていたものと想定される。

91・93は人物埴輪の破片である。91は右肩から斜めに粘土帯を胸前と背中に貼付する。祭服である意須衣を着した女子埴輪と推定される。残存部の状況から右腕を前方に差し出していたようである。93は中空技法による左腕の破片である。ブリッジ右側出土。

90・92・94～96は馬形埴輪の破片である。90は頭部の破片で、全体に写実的な表現である。頭絡、辻金具等を表している。92は鞍の破片である。鞍橋の影らみを粘土塊を貼付して表現している。94は右目の下側の頭絡の破片であろう。辻金具、頬革、手綱等の表現が見られる。胎土・調整等の特徴から90とは別個体である。95・96は飾馬に装着された馬鈴である。

97は家形直輪の堅魚木の破片と思われる。98-100は不明形象直輪である。98は粘土板に粘土粒を貼り付けて鋸留を表現している。おそらく馬具の一部であろう。99は2本の粘土紐を撚り合わせたものである。馬の手綱の先端部、あるいは馬の尾であろうか。類例が第35・52号墳からも出土している。100は外面に撫てを加え、下端に赤彩を帯状に施したものである。人物の着衣の裾と考えられる。

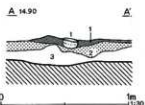
第27号墳 (第147図)

調査区北側の低位面、W・X-30グリッドに位置する。第22号墳と第23号墳の間に挟まれて築造された小規模な円墳である。規模はC区の中で最も小さい。周溝の掘削土量には限界があり、築造当初あまり高い墳丘をもたない低墳丘墓であったと想定される。

周溝の東半分は掘り込みが浅いため検出できなかったが、規模は周溝内径約3.92m、周溝外径約5.0mと推定される。周溝上幅は0.67~0.32mを測り、深さ0.12mと浅い。ブリッジの有無については不明である。周溝覆土には、火山灰は確認されなかった。遺物は土師器片が少量検出されただけで、築造時期は不明である。位置的には南側に所在するB区第15号墳との関連性が窺われる。

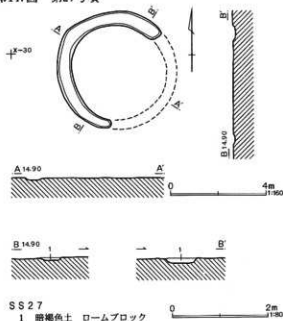
第28号墳 (第148・149図)

調査区北側のQ・R-28~30グリッドに位置する。南西側には第29号墳が近接し、並列して築造されている。第148図 第28号墳出土遺物



- SS 28 (2)
 1 FAブロック
 2 暗灰褐色土 FA粒子・ローム粒子多量
 3 黄褐色土 ロームブロック多量

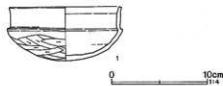
第147図 第27号墳



SS 27
 1 暗褐色土 ロームブロック

西に向くブリッジを有する中規模の円墳である。墳丘部は整った円形を呈し、規模は周溝内径13.44m、周溝外径19.04mを測る。周溝はブリッジの南側が全体に幅広く掘削されているが、北側はやや幅を狭めて直線的になる部分が認められた。周溝幅は3.68~2.08m、深さ0.44mを測る。周溝の断面形は逆台形を呈し、立ち上がりは内側が急で、外側は緩やかである。周溝底面は概ね平坦であるが、周溝南側の底面には不整形の浅い掘り込みが確認された。ブリッジはほぼ直線的に開口し、主軸方向はN-100°Wを示す。

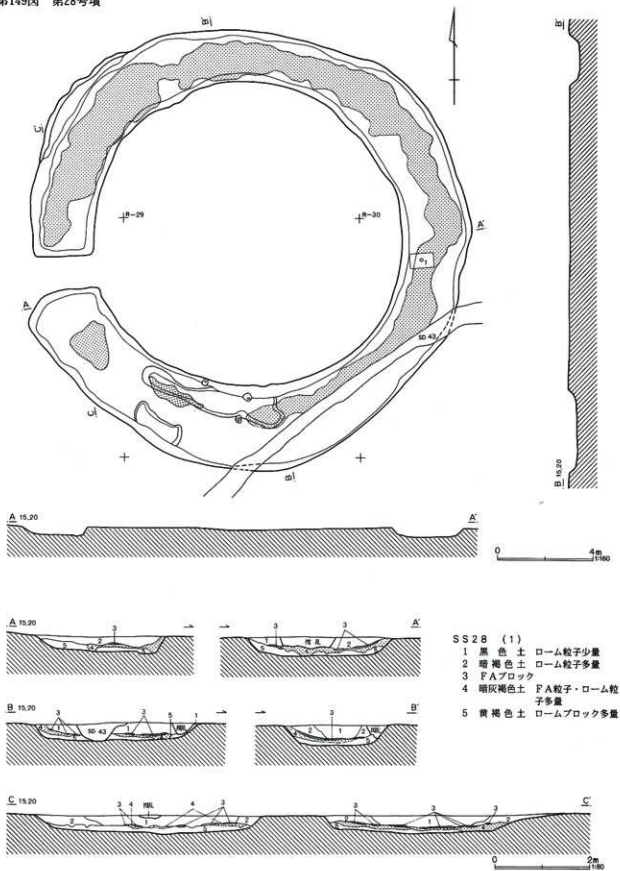
周溝覆土は大きく5層に分けられる。このうち最下



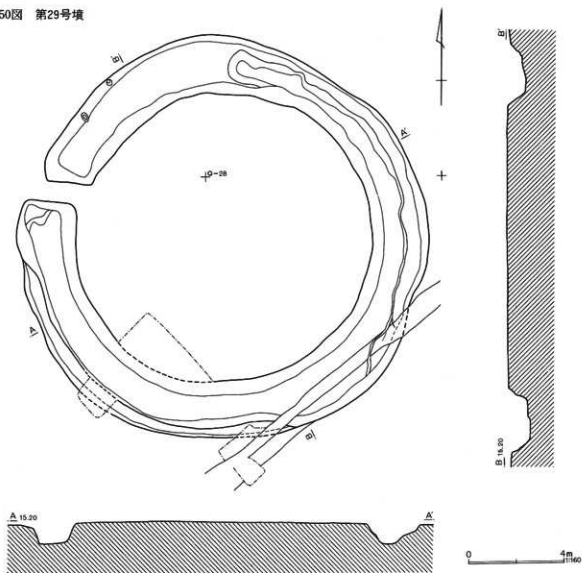
第28号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.9	5.7		B F	B	橙褐	95	

第149図 第28号墳



第150図 第29号墳



層の第5層はロームブロックを多量に含む黄褐色土で遺物の混入がまったく無いことから、周溝掘削時の埋め戻し土と考えられる。その直上をFA粒子を含む暗灰褐色土の第4層とFAブロックの第3層が覆っていることから考えて、古墳築造直後にFAの降下があったものと想定される。FA純堆積層は、厚さ10cmほどでレンズ状に薄く堆積し、分布は周溝の南側でやや稀薄となっていた。

遺物は、周溝東側からFAの混入土に直接覆われた状態で土師器環が単独で出土した。環の中にFAのブロックが入っており、FAの降下時期に近い、限定された時期の築造であろう。

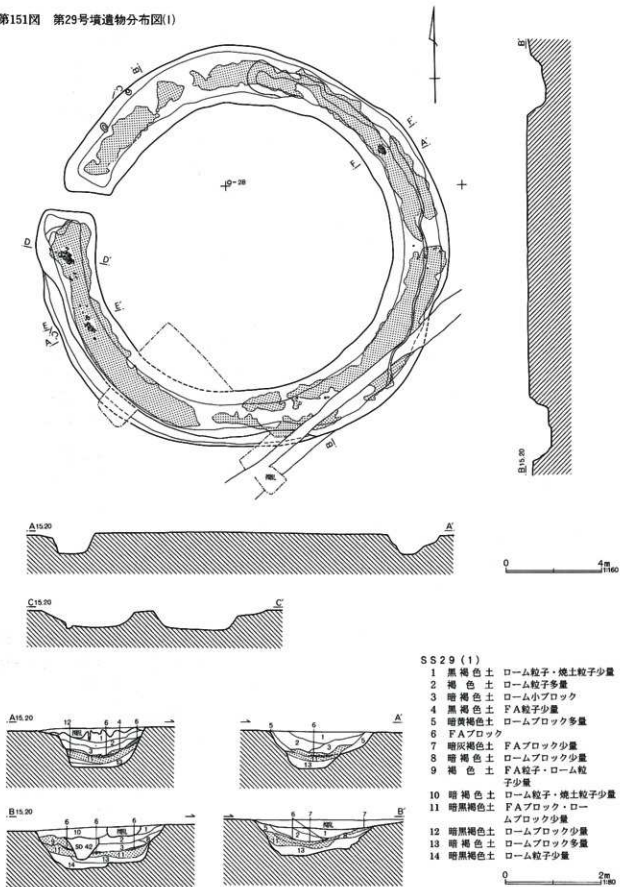
他に周溝覆土から円筒埴輪片が出土しているが、図化したもの以外は細片ばかりであることから、本来埴輪は樹立されていなかったものと考えられる。

第29号墳（第150～155図）

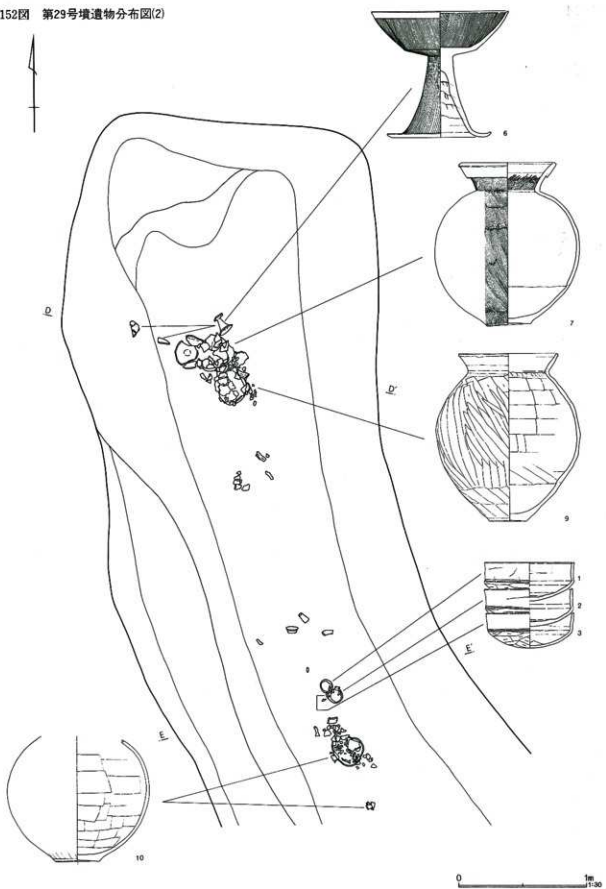
調査区北側の低位面、P・Q-27・28グリッドに位置する。周囲には北西側に第30号墳が、北東側に第28号墳が隣接している。周溝内径12.8m、周溝外径17.6mを測る中規模の円墳である。周溝の北東から南にかけて第42号溝が重複し、周溝底面が壊されていた。また墳丘部は一部後世の攪乱を受けていた。

墳丘部は整った円形を呈し、第28号墳よりも一回り小さい。周溝は一定の幅で巡っているが、第28号墳に

第151図 第29号墳遺物分布図(1)

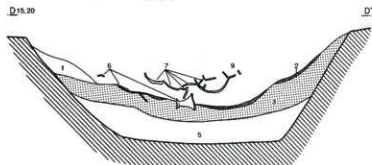


第152图 第29号墳遺物分布图(2)

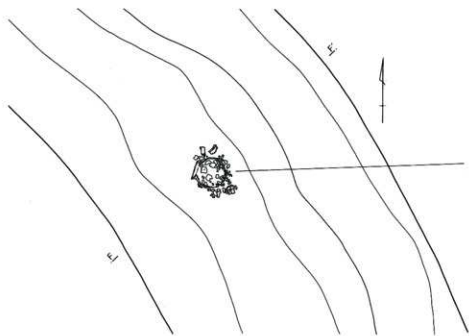
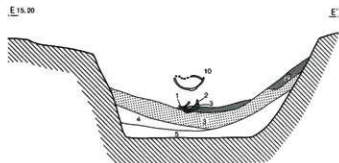


第153図 第29号墳遺物分布図(3)

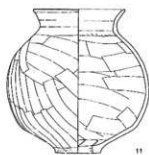
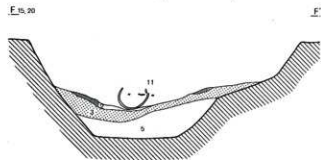
D 15.20



E 15.20



F 15.20

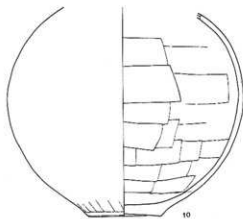
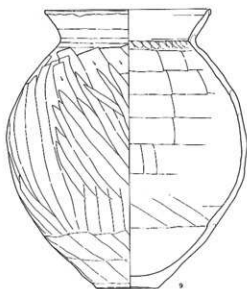
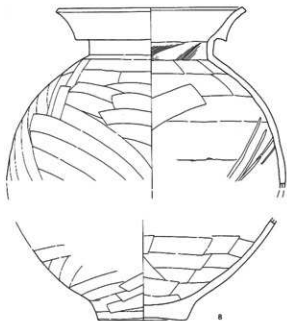
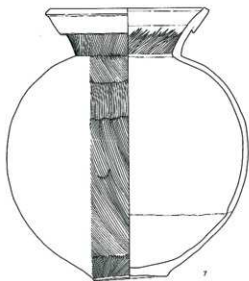
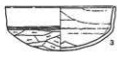
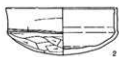


SS 29 (2)

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
- 2 FAブロック
- 3 暗黒褐色土 FAブロック・ロームブロック少量
- 4 暗黒褐色土 ロームブロック少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量

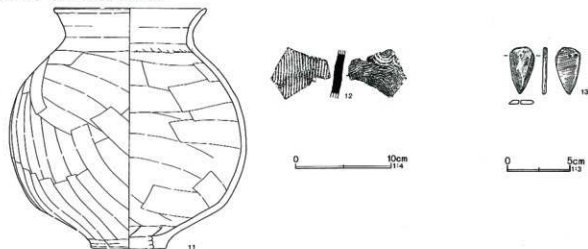
0 1m
1:30

第154图 第29号出土文物(I)



0 10cm
1:4

第155図 第29号墳出土遺物(2)



第29号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.9	5.0		BEF	A	橙褐	95	
2	坏	11.6	5.0		BEF	A	橙褐	80	
3	坏	11.6	4.6		ABF	A	橙褐	100	
4	埴	(8.0)	(5.6)		BF	B	灰白	40	
5	埴		(4.7)	3.9	BEF	A	橙褐	100	
6	高坏	18.1	16.6		ABFI	A	赤褐	80	赤彩
7	壺	16.2	28.6	7.8	ABEFI	B	橙褐	90	
8	壺	19.5	(19.0)		ABF	A	淡褐	60	
8	壺		(10.6)	9.4	ABFI	A	淡褐	70	
9	甕	17.3	29.5	6.5	ABFI	A	淡褐	90	
10	壺		(22.0)	7.7	ABFI	A	橙褐	70	
11	甕	15.8	25.4	(8.0)	ABFI	A	褐	60	
12	甕				BG	A	青灰		
13	剣形模造品								長さ3.7 幅1.9 厚さ0.3 孔径0.1cm

最も近接する北東側では第28号墳を避けるように周溝の幅を狭め、直線的になっていた。周溝の在り方から見て、第28号墳よりも後に築造されたものと考えられる。周溝幅2.80~1.76m、深さ0.96mを測り、断面箱形を呈する。周溝の底面は概ね平坦であるが、北側から東側にかけては底面を一段深く掘り込んでいた。このような造作は見かけ上の墳丘高を強調するために、あるいは排水のために掘削されたのであろうか。

ブリッジはほぼ西を向き、上幅0.82m、下幅2.0mの狭小なもので、墳丘に対してやや斜めに取り付いていた。主軸方向はN-75°-Wを示す。またブリッジ右脇にはステップ状に地山を掘り残した部分が認められた。これは周溝掘削時における作業用の足場の可能性が考

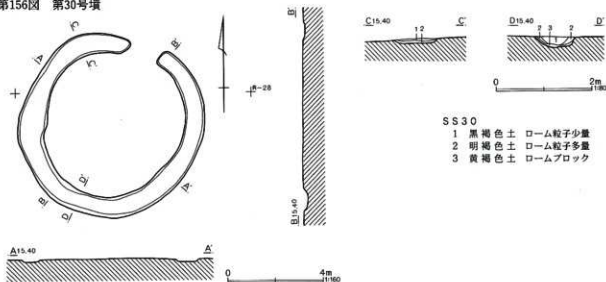
えられる。

周溝覆土は大きく7層に区分される。このうち最下層の第13・14層はロームブロックを混入した暗褐色土及び暗黒褐色土で、周溝を掘削した際の埋め戻し土と想定される。この上にはロームブロックを少量混入した暗黒褐色土が部分的に堆積するだけで、ほとんど間層を挟まずに、FAの混入土層が周溝の各所で検出されている。おそらく、築造直後にFAの降下があったものと推定される。

遺物はブリッジ右側を中心に土師器坏、埴、高坏、壺、甕、須恵器甕、剣形石製模造品等が出土した。

ブリッジ右脇から6の赤彩された高坏、7の複合口緑壺、9の甕がFA純堆積層より少し浮いた状態でま

第156図 第30号墳



とまて出土した。これらは型式的には和泉期に位置づけられるもので、周辺の当該時期の住居跡からの混入と考えられる。

さらに周溝の南西側からは1～3の土師器環が積み重ねられた状態で出土した。FA純堆積層に直接覆われた状態で検出されたもので、環の中にはFAブロックが入り混んでいた。これらは築造当初、周溝底面に置かれていたものと推定され、FAの降下時期を検討する上で良好な資料である。また環の南側の土層からは和泉期の壺と考えられる10が口縁部を欠損した状態で出土した。

ブリッジの反対側にあたる北東側周溝からは、ほぼ完形の甕11が単独で検出されている。FA純堆積層である第2層の直上より出土しており、墳丘部から転落した可能性も考えられる。

第154図1～3は模倣坏で、いずれも胎土・焼成・色調等の特徴が共通し、直接古墳に伴う遺物である。第155図11は土師器甕である。球胴形の胴部に突出する底部をもち、出土状況から古墳に伴うものと考えられる。12は須恵器甕の胴部片である。外面は擬格子状の平行叩き、内面は目の細かい同心円文の当具痕を残す。13は滑石製の剣形模倣造品である。長さ3.7cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、孔径0.1cm、重量3.96gである。両面穿孔で、整形痕を良く残す。色調は黒色を呈する。ブ

リッジ左側の周溝覆土中より出土した。

第30号墳 (第156図)

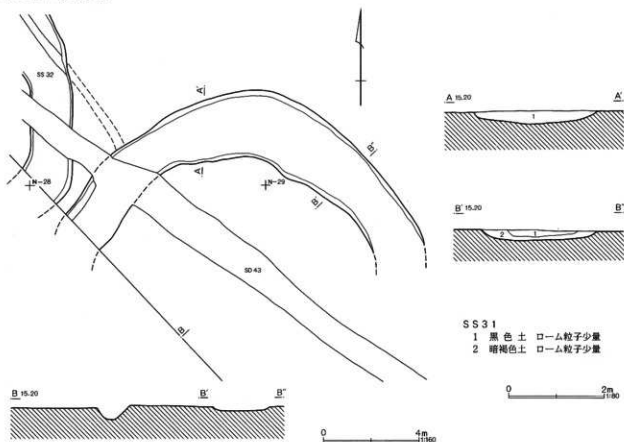
調査区北側のQ・R-27グリッドに位置する。第29号墳の北西に隣接し、最も間隔の狭まったところで約1mを測る。北東に向くブリッジを有する小型の円墳で、墳丘及び周溝は後世の擾乱によって一部壊されていた。

墳丘部は西側で上端が僅かに乱れるが、ほぼ正円形に近く、規模は周溝内径6.24m、周溝外径8.0mの小規模なものである。周溝は概ね一定の幅で巡っているが、南西側でやや幅を広げ、第29号墳に最も近い南東側では周溝外縁がやや直線的となり、第29号墳の存在を意識していた。周溝幅1.28～0.8m、深さ0.24mを測る。周溝底面は概ね平坦であるが、ブリッジの両脇は浅くなり、立ち上がりも緩やかである。周溝の南側は幾分深く掘り込まれ、断面箱形を呈する。

ブリッジは北東に向かって開口し、主軸方向はN-26°-Eを指す。ブリッジの向きが周囲の古墳と大きく異なる。これは先行して築造されていた第28・26号墳等の存在に影響されたものであろうか。周溝覆土は大きく3層に区分される。ローム粒子を混入した黒褐色土及び明褐色土を主体とし、火山灰等の混入は確認できなかった。

遺物は周溝内から土師器甕の破片が少量検出された

第157図 第31号墳



だけで、図化できるものはほとんどなかった。

第31号墳（第157図）

M・N-28・29グリッドを中心に位置し、東側には第32号墳が近接する。南東方向から湾入する埋没谷の中に立地しており、谷部埋土の黒褐色土を切り込んで構築されていた。そのため周溝の東から南にかけては次第に周溝の掘り込みが浅くなり、消滅していた。また墳丘部分は第43号溝によって切られ、合流する第73号溝によって周溝西側が壊されていた。さらに周溝の西側から南側にかけては未調査部分にかかるため、全体の約2分の1を調査したにすぎない。

このように部分的な確認のため古墳の形状・規模等については不明な点が多いが、円墳と仮定した場合、規模は周溝内径11.64m、周溝外径15.24mと復元される。周溝は全体に掘り込みが浅く、幅は一定していない。周溝の最大幅3.04m、最小幅1.76mを測り、立ち

上がりは緩やかで、深さは0.56m前後である。周溝覆土はローム粒子を少量混入する黒色土及び暗褐色土が堆積し、火山灰等の混入物は確認できなかった。

遺物は周溝内から土師器、埴輪等の破片がごく少量検出されているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。

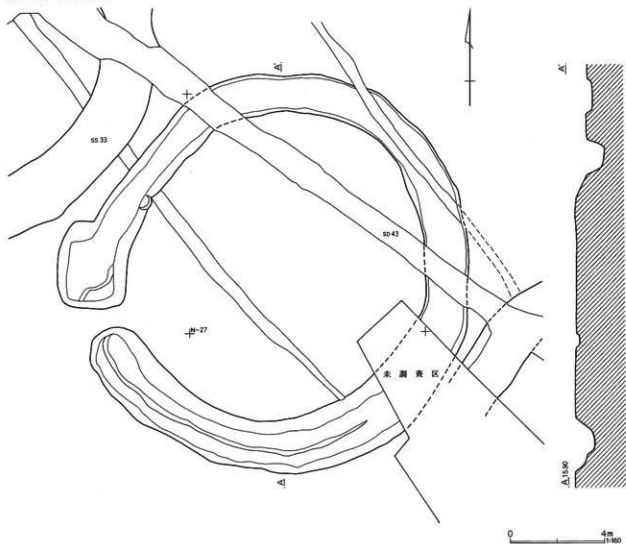
第32号墳（第158～160図）

調査区中央部のM・N-26～28グリッドに位置し、南東に第31号墳、北西に第33号墳がそれぞれ近接する。地形的には低位面から上位面に移行する緩斜面部に立地している。

西に向くブリッジをもつ中規模の円墳で、周溝南側に一部未調査部分を残す。墳丘部分は第43号溝をはじめとする数条の中・近世の溝によって切られ、ブリッジの左側に第44・45号土壌が重複していた。

墳丘部は南北にやや長い楕円形を呈し、規模は周溝

第158図 第32号墳



内径13.2m、周溝外径17.2mを測る。周溝は北西に接する第33号墳の存在を意識して周溝の幅を狭め、直線的に変形しているが、他の部分は一定した幅で回り、南側は全体に深く掘削されていた。周溝幅2.88-1.44mを測り、確認面から底面までの深さは最深部で1.52mである。ブリッジは斜面の上位面を向いて撥形に開き、主軸方向はN-104°-Wを示す。

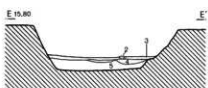
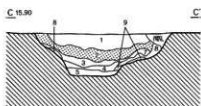
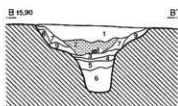
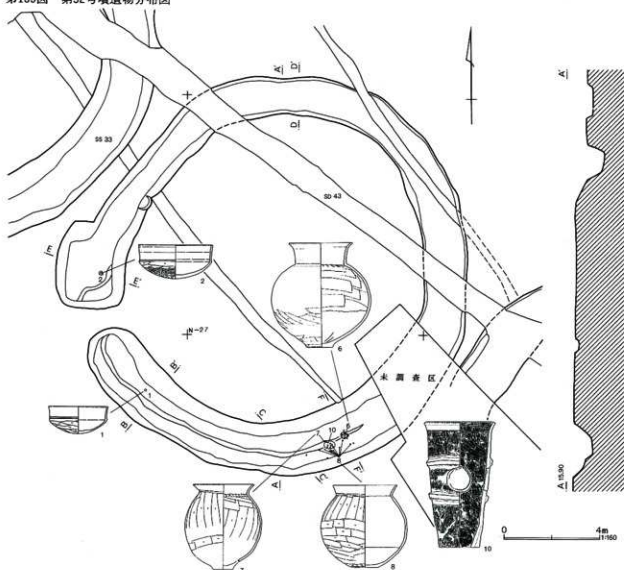
周溝覆土は9層に細分された。基本的には周溝掘削土による埋め戻し土である第5・6層と、墳丘流入土である第3・4層を間層に挟んで、FAブロック・ローム粒子を含む黒褐色土の第2層が覆土中層に確認されている。第33号墳との先後関係は周溝の在り方や土層断面の検討から、本墳が第33号墳の後に築造されたよ

うである。しかし、周溝覆土におけるFA層の流入状況等が類似しており、築造時期は比較的近接したものと推定される。

遺物は周溝内から土師器環・壺、円筒埴輪、土玉等が出土した。ブリッジの両側と周溝南側に散在した方角を示し、遺物量は全体に少なかった。

ブリッジの両側から単独で土師器環が1点ずつ出土している。ブリッジ右側の周溝中央から1の環が正位の状態で見出された。土層断面B-B'の観察によれば、周溝底面に溝状に掘られた掘り方の埋め戻し層直上に置かれていたようで、FA混入土である第2層下部に位置している。またブリッジ左側の墳丘寄りの部分から2の大型環が、正位の状態で見出された。

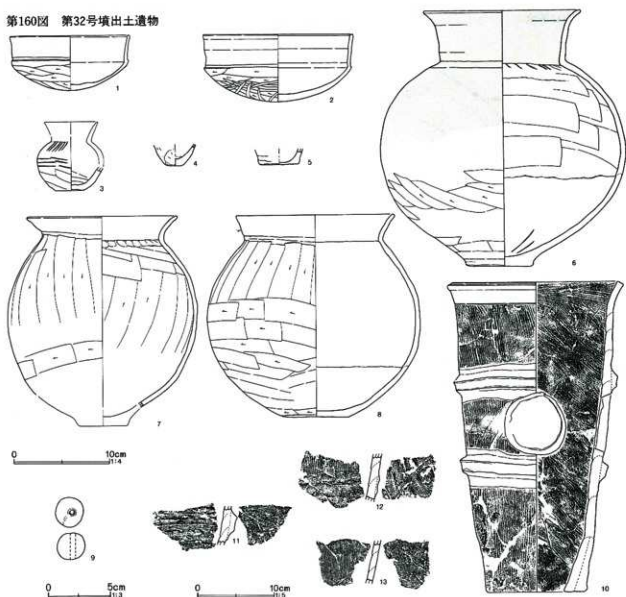
第159図 第32号墳遺物分布図



SS 32

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 FAブロック・ローム粒子
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量
- 8 明褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量

第160図 第32号墳出土遺物



第32号墳出土遺物観察表

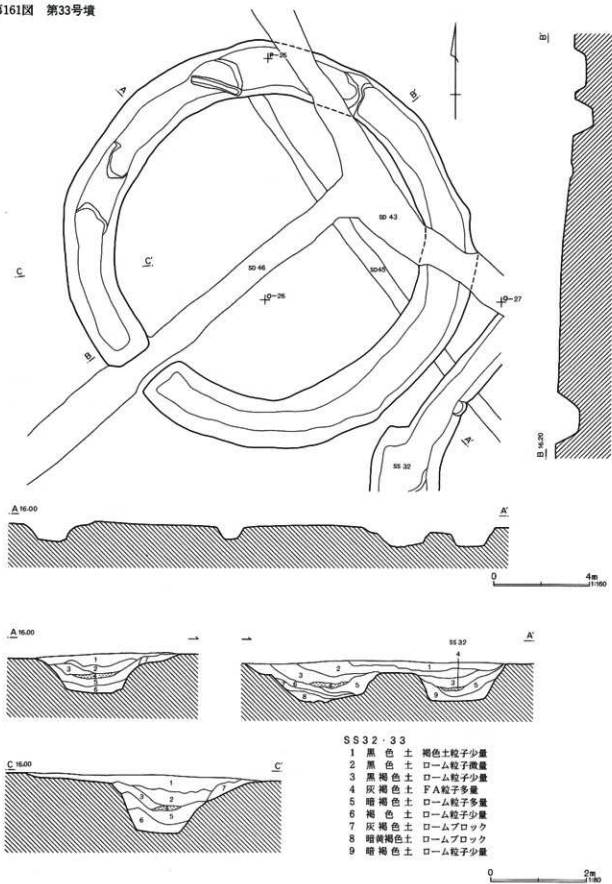
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.6	5.8		BEF	B	橙褐	95	
2	坏	15.8	7.0		BEF	A	橙褐	100	
3	埴			3.0	BF	A	淡褐	70	
4	ミニチュア		(2.3)		ABF	A	淡褐	40	
5	ミニチュア		(1.6)	4.0	ABF	A	淡褐	30	
6	壺	16.4	27.0	7.0	ABFI	A	赤褐	60	赤彩
7	甕	15.8	(20.1)		BEFI	A	淡褐	70	
8	甕	16.6	21.2	6.9	ABFI	A	褐	60	
9	土玉					A	淡褐		外径2.2 孔径0.5 厚さ2.1cm

浮いた状態で出土した。土層断面E-E'の観察によれば、周溝埋め戻し層の第4・5層の上に正位の状態て置かれていた。両者とも完形品であることから、築造当初の埋葬儀礼に伴って周溝底面に置かれたものと推

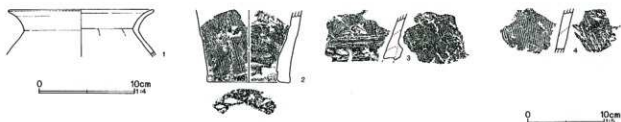
定される。

他に周溝南側から6の壺、7・8の甕、及び10の円筒埴輪がまとめて出土した。6は赤彩を施した壺で周溝底面から少し浮いた状態で出土し、古墳に直接伴

第161図 第33号墳



第162図 第33号墳出土遺物



第33号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	埴	(15.2)	(5.0)		BEF	B	褐	10	

う遺物である。7・8は覆土中層から出土し、墳丘外側からの流入状況を示し、混入の可能性が高い。

10の円筒埴輪は覆土中層から出土したもので、概ね完形に復元された。2条突帯の円筒埴輪で突帯は断面台形である。色調は乳白色を呈し、比較的古相を示す。口径21.8cm、底径12.6cm、器高40.7cmを測る。

これ以外に11-13の円筒埴輪片が出土しているが、量的には極めて少量で本来埴輪が樹立されていたとは考え難い。限定的な配列状況等を想定すべきかも知れない。

この他に3の埴、4・5のミニチュア土器、9の土玉が出土している。

第33号墳 (第161・162図)

N・O-25・26グリッドに位置し、南東に第32号墳が近接する。地形的には低位面から上位面に移行する緩斜面部に立地し、標高15.5m付近である。

北西に向くブリッジを有する中型の円墳で、規模は周溝内径13.28m、周溝外径17.6mを測る。第32号墳と最も接近したところで0.4mほどの間隔しかなく、第32号墳が本墳を意識して周溝を直線的に変形していた。さらに第32号墳の南東に第31号墳が所在し、この3基がほぼ一列に並んだ状態で築造されていた。3基の築造順序は周溝の在り方及び周溝覆土の観察から、第33→32→31号墳の順序で台地の高い方から低い方に向かって墓域を拡大した状況が窺われた。

墳丘部分の中・近世に掘削された第43・45・46号溝が走行し、中世以降、墳丘の削平がかなり進んだようである。また、北側の周溝底面には縄文時代のTピットと考えられる第56号土壌が検出された。

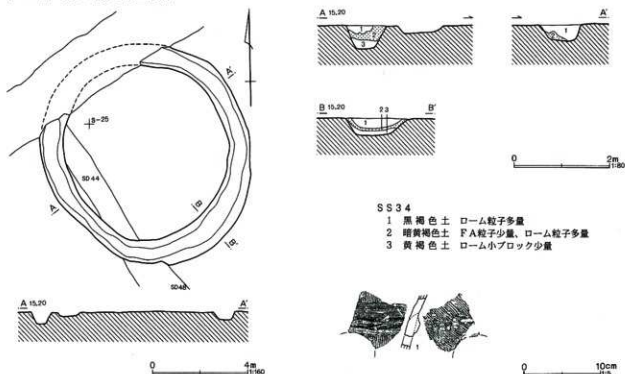
墳丘部は比較的整った円形を呈し、墳丘盛土は既に削平されていたが、墳丘南西側に一部旧表土と推定される黒色土の堆積が確認された。周溝はほぼ一定の幅で巡り、周溝幅2.56~1.76m、深さ1.28mを測る。周溝底面には凹凸が認められ、ブリッジの左側と周溝西側から北側にかけては部分的に一段深く掘り込まれていた。周溝の断面形は逆台形に近いが、墳丘側は立ち上がりか緩やかで、外側はやや急傾斜である。

ブリッジは地山を掘り残して構築されたものである。台地上位面を向いているが、中央を第46号溝が走り、大きく壊されていた。ブリッジは直線的に開口し、主軸方向はN-135°-Wを示す。

周溝覆土は大きく8層に区分される。最下層の第8層はロームブロックを含む暗黄褐色土で、周溝掘削土と推定される。その上に堆積する第5~7層は墳丘流入土に相当し、その上にFA粒子を混入する灰褐色土である第4層が覆土中層に確認された。

遺物の出土量は相対的に少なく、土器器篋、円筒埴輪の破片が出土したにすぎない。埴輪は図化したもの以外には細片しかなく埴輪の出土量からみて、当初から埴輪は樹立されていなかったものと考えられる。

第163図 第34号墳と出土遺物



第34号墳 (第163図)

R・S-24・25グリッドに位置し、南西側には第35号墳が近接する。周溝の北側は第23・39号溝によって壊され、墳丘部の西側は第44・48号溝と重複していた。そのため正確な規模の計測はできないが、周溝内径約7.36m、周溝外径約9.12mの小規模な円墳と推定される。同規模の小型墳である第30・38号墳が隣接しており、古墳群内における小型墳の占地に何らかの規制が存在したことを窺わせる。

墳丘部は整った円形と推定される。周溝は第35号墳に接近する南東側でやや幅を減じているほかは、一定した幅で巡る。周溝幅1.36～0.72mを測り、周溝底面は概ね平坦で、断面逆台形を呈する。周溝の深さは、0.5m前後と小規模な円墳としては掘り込みが深い方である。ブリッジの有無については不明である。

周溝覆土は基本的に3層に区分される。最下層にローム小ブロックを少量含む黄褐色土、その上にFA粒子を少量含む暗黄褐色土が薄く堆積していた。

遺物は覆土中から埴輪、土師器片が少量出土してい

るが、いずれも混入したものと考えられる。

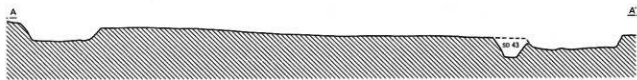
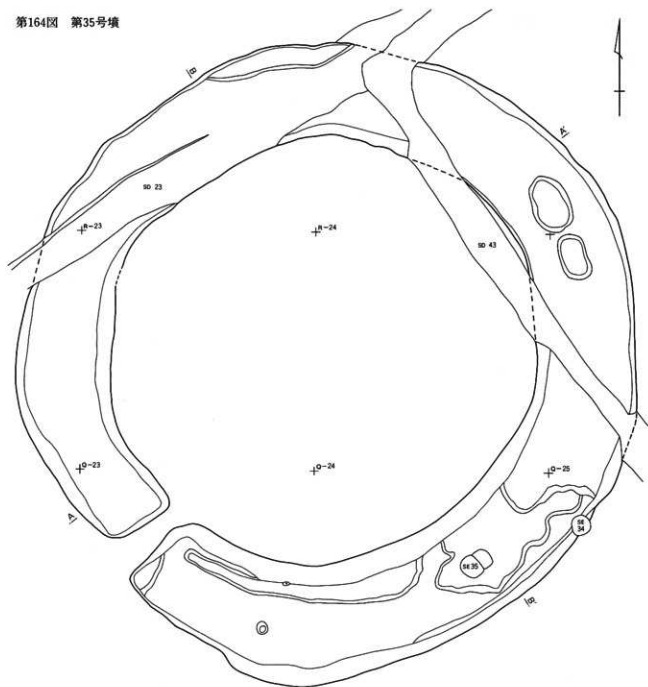
第35号墳 (第164～178図)

調査区中央のP-23・24、Q-R-22～25グリッドに位置する。地形的には北側から湾入した埋没谷の谷頭部分に占地し、標高15.5m付近に立地している。周囲には、北側に周溝を接するように第40号墳が築造され、北東側には第34号墳が隣接する。

南西方向に開口するブリッジをもつ周溝内径18.8m、周溝外径27.2mを測る大型の円墳で、今回の調査では墳丘規模としては最大のものである。周溝北側を第23号溝が北東から南西にかけて墳丘裾をかすめるように走行し、第23号溝から南に分岐する第43号溝が周溝東側の墳丘裾を切って重複していた。

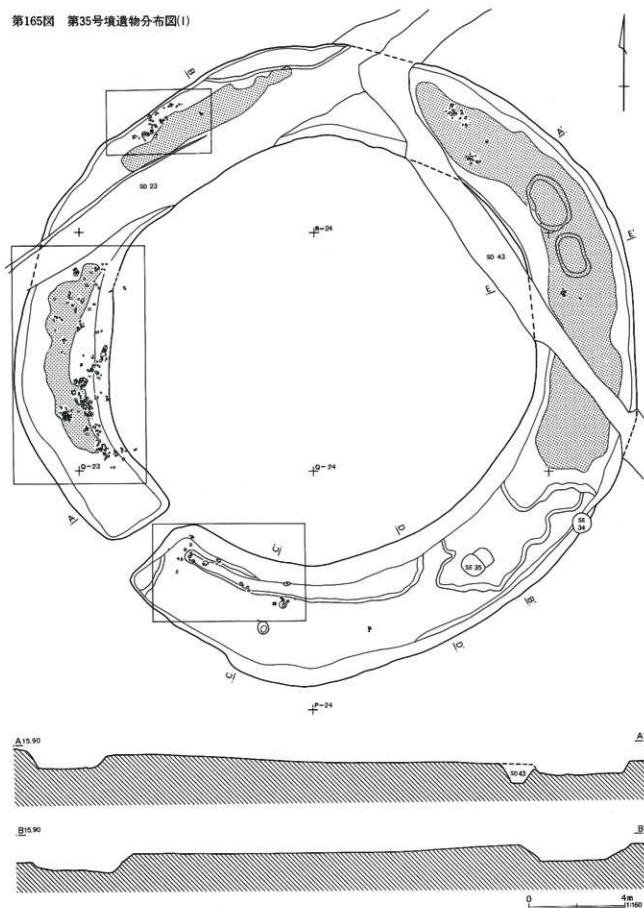
墳丘部の平面形態は溝によって一部壊されているため不明な点もあるが、比較的形の整った正円形を呈する。周溝は、幅5.12～3.2mと全体に幅広く巡らしていた。周溝底面は概ね平坦である。ブリッジ左側は墳丘裾を溝状に一段深く掘り込み、その部分を掘削土によって埋め戻しを行っていた。周溝の断面形は逆台形を

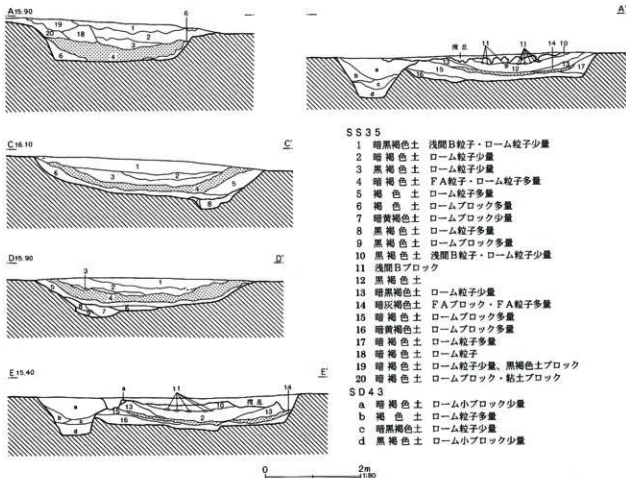
第164图 第35号墳



0 4m
1/160

第165図 第35号墳遺物分布図(1)





呈し、立ち上がりは比較的緩やかで、深さは最深部で1.16mを測る。

ブリッジは南西に向かってほぼ直線的に開口し、上幅1.24m、下幅1.76mを測る。主軸方向はN-135°-Wを示す。またブリッジの右脇には、地山をスロープ状に掘り残した部分が検出された。

周溝覆土はブリッジ付近では9層に分けられる。先述したように第7～9層は、ロームブロックを主体に包含する周溝掘り方の埋土である。周溝底面にはロームブロックを多量に含む褐色土の第6層と、墳丘流入土である第5層が堆積し、その上にFA粒子を混入する暗褐色土（第4層）がレンズ状に堆積していた。

また、周溝東側の低位面における周溝覆土の状況は大きく7層に区分される。最下層にはロームブロックを主体に包含する第15・16層が堆積し、その直上を覆うようにFAブロック・粒子を多量に含む暗灰褐色土

（第14層）がレンズ状に薄く堆積していた。その上には第12・13層を間層に挟んで、浅間B軽石の純層（第11層）及び混入土層（第10層）が堆積していた。

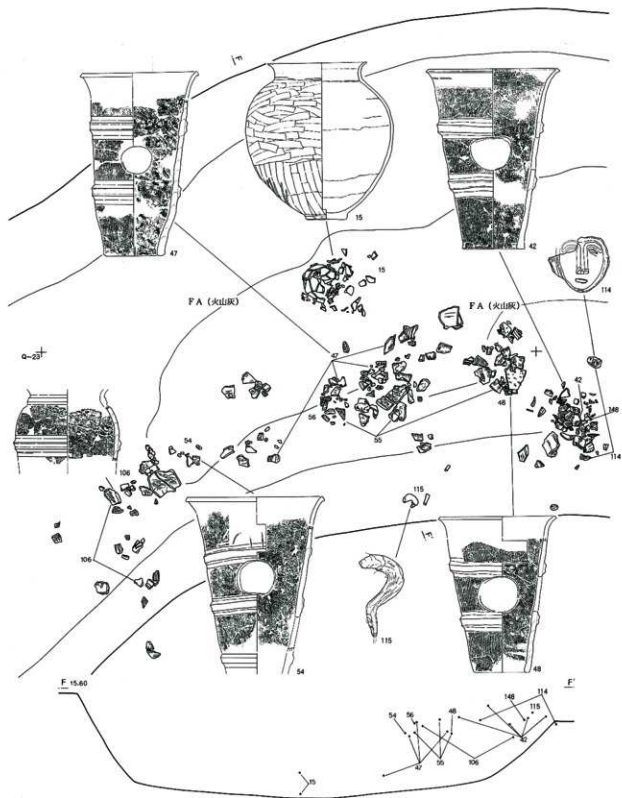
全体としてはブリッジの北側から東側周溝にかけてFAの純層が良好に残り、周溝中央の底面から10～20cm程浮いた状態で、レンズ状の堆積を示していた。

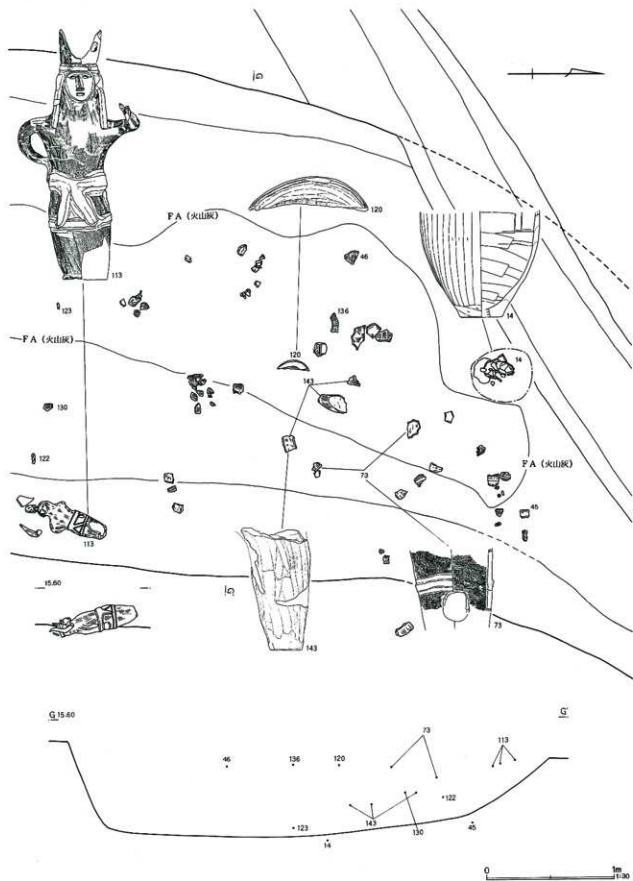
周溝覆土中からは土師器・短頸壺・直口壺・甕・鉢、須恵器有蓋高坏・甕、滑石製紡錘車、剣形石製模造品、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・馬・大刀・不明）等の豊富な遺物が出土した。

遺物の分布状況は、(1)ブリッジ南側、(2)ブリッジ北側、(3)周溝北側の大きく3か所に集中して出土している（第165図）。

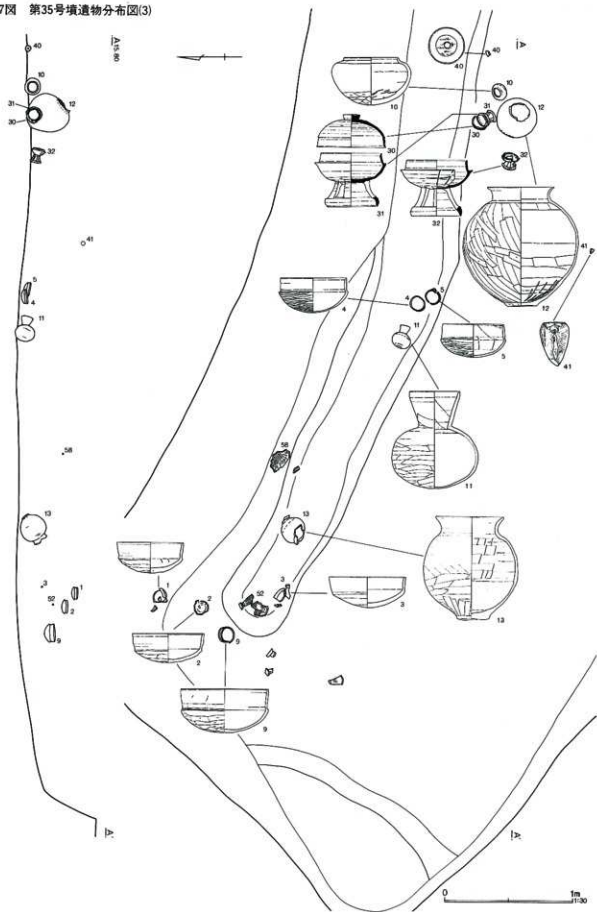
(1)のブリッジ南側では、周溝底面に掘え置かれた土器と墳丘から流れ込んだ状況を示す土器が、3つの小ブロックに分かれて出土した（第167図）。便宜

第166図 第35号墳遺物分布図(2)

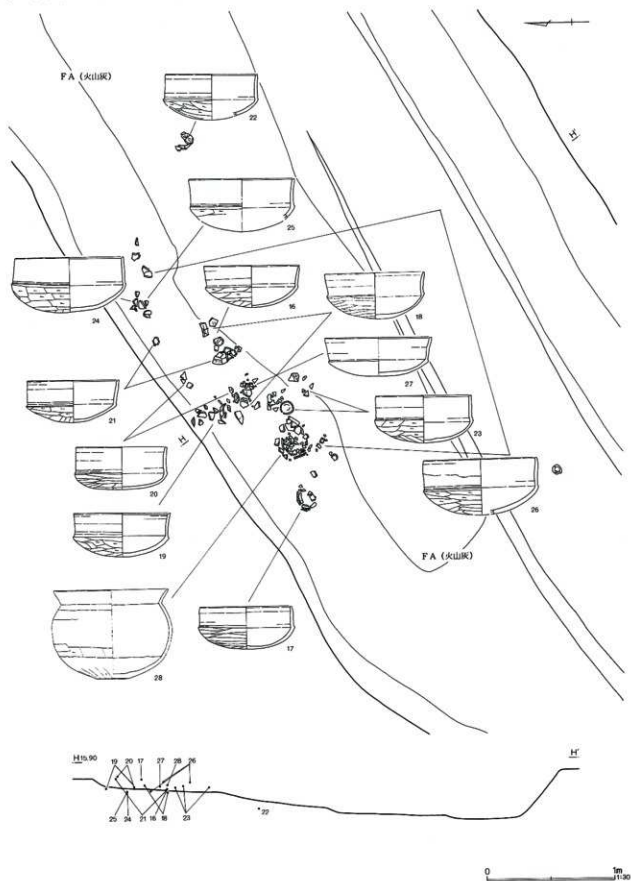




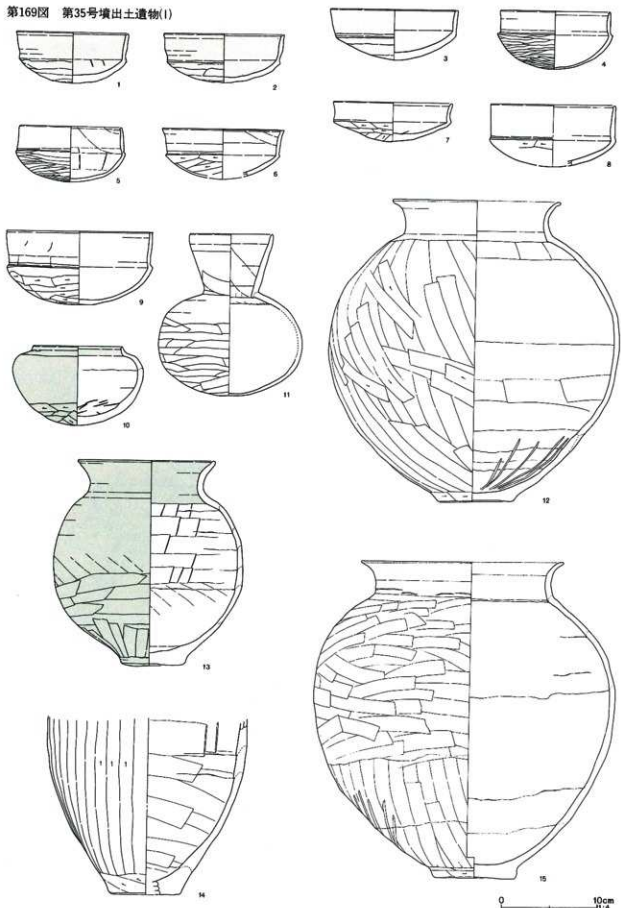
第167图 第35号墳遺物分布图(3)



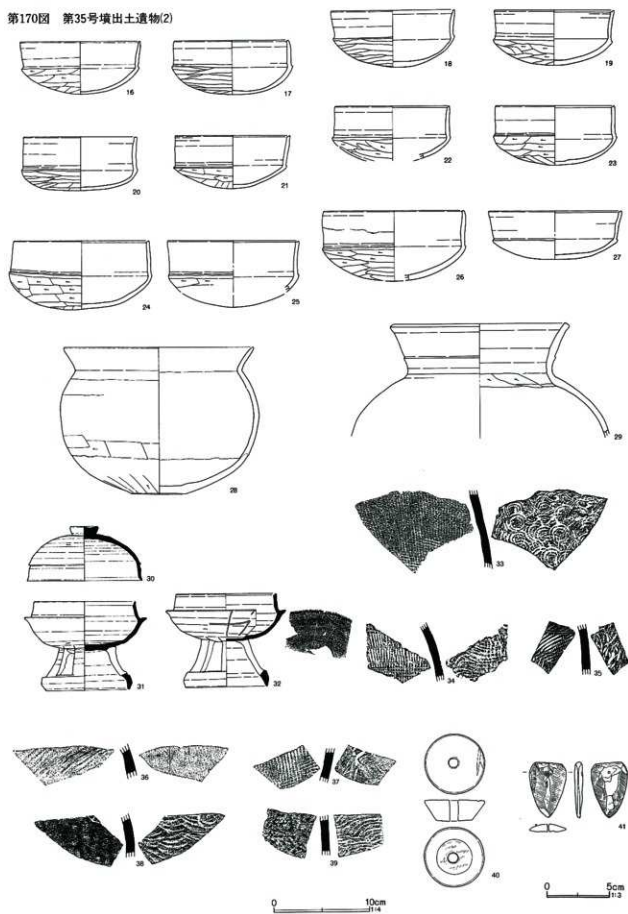
第168图 第35号墳遺物分布图(4)



第169図 第35号墳出土遺物(1)



第170图 第35号墳出土遺物(2)



第35号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.8	5.3		EF I	B	橙褐	90	赤彩
2	坏	12.6	5.1		EF I	B	褐	85	赤彩
3	坏	13.6	5.3		BF I	D	淡褐	90	赤彩
4	坏	11.5	6.1		BEF	A	明赤褐	100	
5	坏	10.6	5.9		BF	A	明赤褐	95	
6	坏	12.8	5.1		BE	A	暗赤褐	70	
7	坏	12.6	4.1		BEF	B	橙褐	75	
8	坏	(13.1)	6.4		BEF	A	淡褐	20	
9	坏	15.5	5.6		BCE	A	赤褐	100	
10	短頸壺	9.4	8.4		AB I	A	淡褐	100	赤彩
11	直口壺	8.7	17.0		BEF	A	橙褐	100	
12	壺	21.1	33.3	8.5	ABEF	A	赤褐	90	
13	壺	14.3	21.7	6.5	ABEF	A	橙褐	80	赤彩
14	甕	(18.6)	(7.3)		BEF	B	橙褐	40	
15	壺	17.5	31.7	7.8	ABEF	A	赤褐	90	
16	坏	12.6	5.6		BE	A	暗赤褐	75	
17	坏	12.0	5.6		BEF	A	赤褐	100	
18	坏	13.0	6.1		BE	A	淡褐	60	
19	坏	12.7	5.8		BEF	A	暗褐	55	
20	坏	12.0	5.6		BEF	A	橙褐	90	
21	坏	12.1	5.5		BEF	B	淡褐	90	
22	坏	12.1	6.0		ABF	B	淡褐	40	
23	坏	12.6	6.2		BEF	B	淡褐	55	
24	坏	14.2	7.3		BEF	B	橙褐	60	
25	坏	(13.9)	5.4		BEF	A	橙褐	20	
26	坏	14.8	7.3		BEF	A	赤褐	40	
27	坏	14.0	5.0		BEF	B	淡褐	40	
28	鉢	20.0	15.5	5.7	BEF	B	橙褐	80	
29	壺	(18.2)	12.0		ABF	A	赤褐	10	
30	蓋	12.2	5.8		BG J	A	灰	95	
31	高坏	10.7	9.5		BG	A	灰	100	
32	高坏	10.5	9.8		BC J	A	暗灰	85	ヘラ記号
33	甕				BF	A	青灰		
34	甕				BFG	A	暗灰		
35	甕				BG	A	灰		
36	甕				BFG	A	暗灰		
37	甕				BG	A	暗灰		
38	甕				BF	A	暗灰		
39	甕				BG	A	青灰		
40	紡錘車								外径4.7 孔径0.8 厚さ1.7cm
41	網形模造品								長さ4.4 幅2.9 厚さ0.6 孔径0.15cm

上、ブリッジ右脇から順番にA～C群と仮称する。

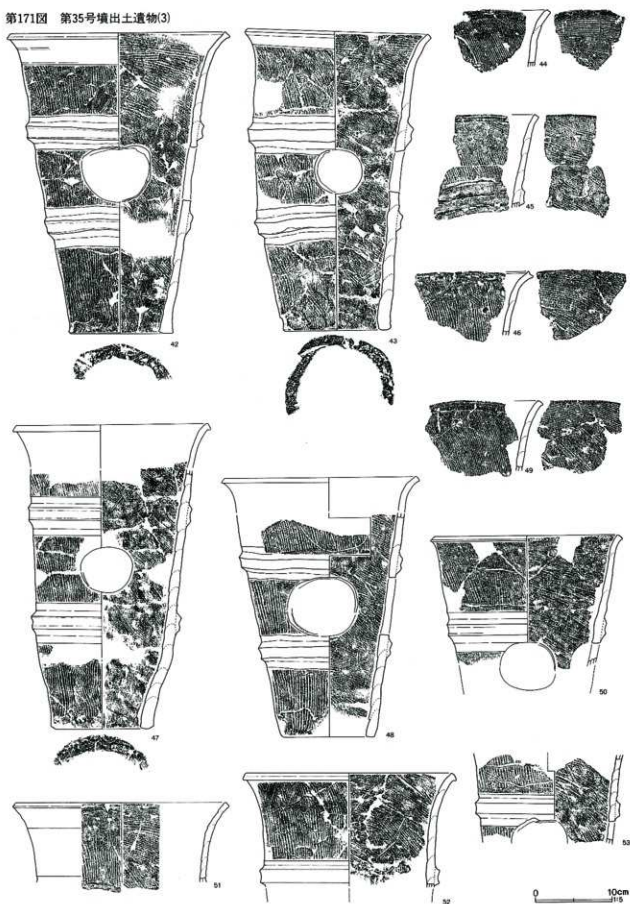
ブリッジ右脇のA群は、1～3の赤彩された坏と9の大型坏が、墳丘裾ないしはブリッジ上から流れ込んだ状態で出土している。また13の赤彩された小型壺は、周溝底面に近い位置から横倒しの状態で出土し、溝底面に置かれていたものと思われる。

B群は、4・5の横散坏と11の直口壺が、周溝底面

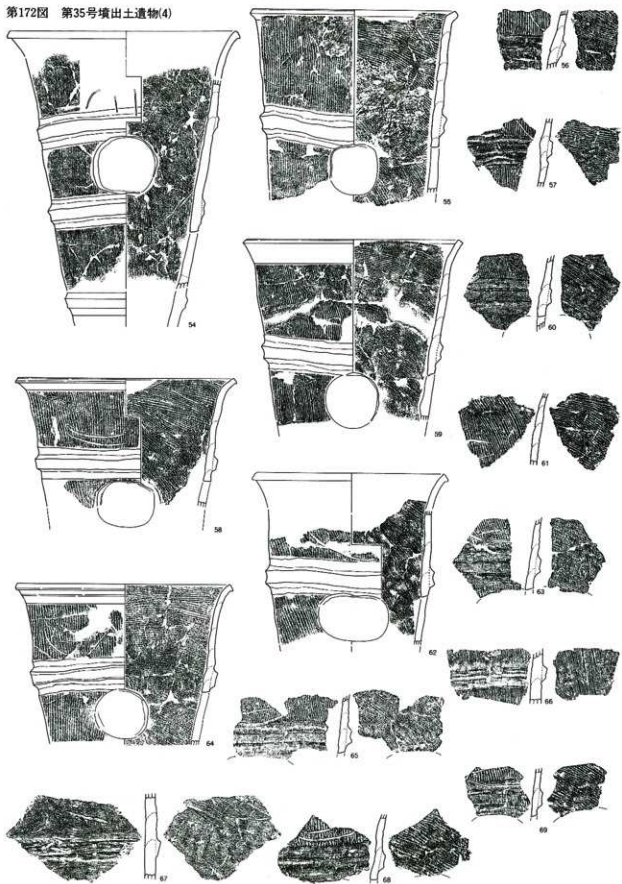
に据え置かれた状態で出土した。坏は口縁部を上に向けて、接するように置かれ、直口壺はその西側に横倒しとなっていた。

C群は12の大型壺を中心に、その周りから10の赤彩された短頸壺、30～32の須恵器有蓋高坏、及び40の滑石製紡錘車がまとまって検出された。このうち30の蓋と31の高坏は、蓋を被せた状態で置かれていたもの

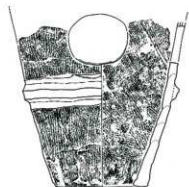
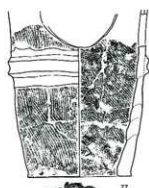
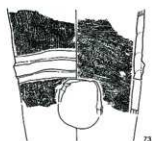
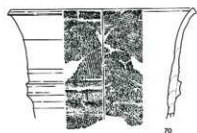
第171図 第35号墳出土遺物(3)



第172図 第35号墳出土遺物(4)

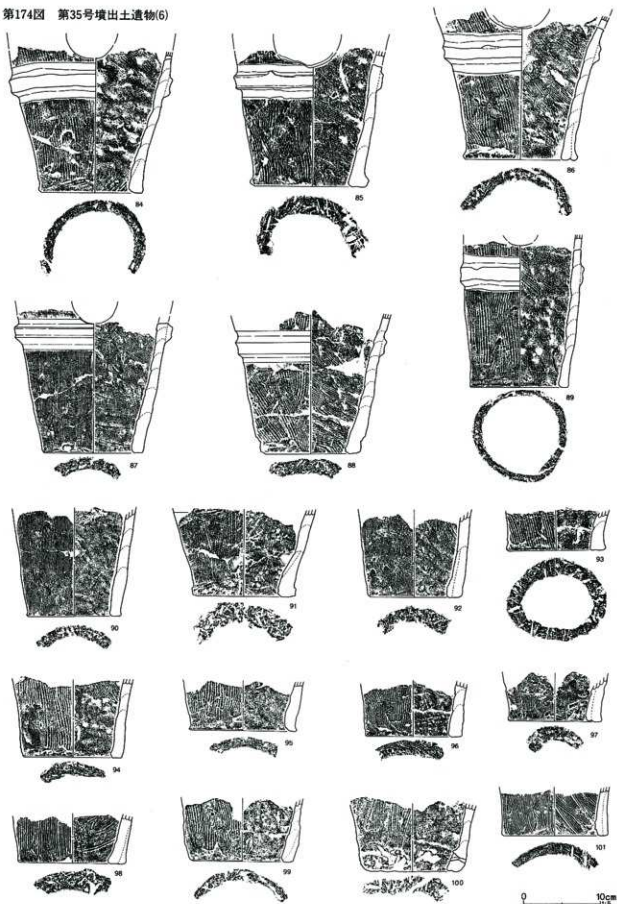


第173图 第35号填出土遗物(5)

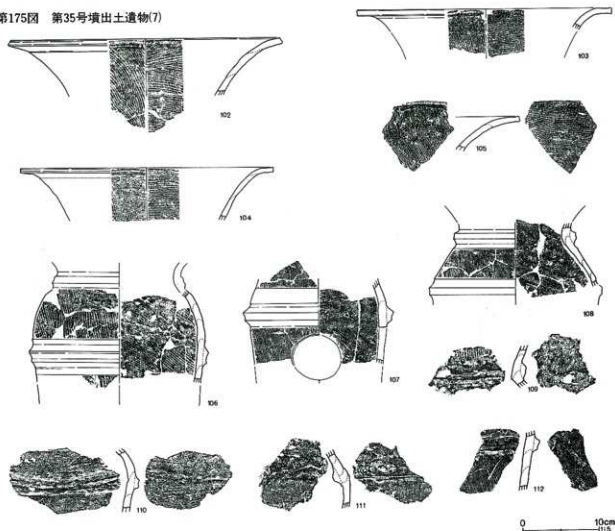


0 10cm
1:5

第174図 第35号墳出土遺物(6)



第175図 第35号墳出土遺物(7)



が、倒れた状態で出土した。一方、32の高環には組み合わさる蓋の出土はなかった。他にB群とC群の間の覆土上層から41の剣形模造品が単独で出土した。

(2)のブリッジ北側では、周溝の覆土上層に流れ込んだ状態で多量の埴輪が検出されたほか、周溝底面付近に堆積したFA層の直上から15の大型壺と14の赤色顔料を入れた甕が出土した(第166図)。

(3)の周溝北側の第40号墳に近接した周溝外縁部からは、細かく破砕された環(16~27)と大型鉢(28)が、FA混入土に直接覆われた状態で、集中して出土した(第168図)。ここから出土した環には、型式的な特徴に差異が認められ、多少、時期幅のあるものが混在したあり方を示していると推定される。

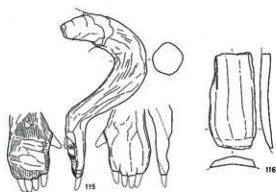
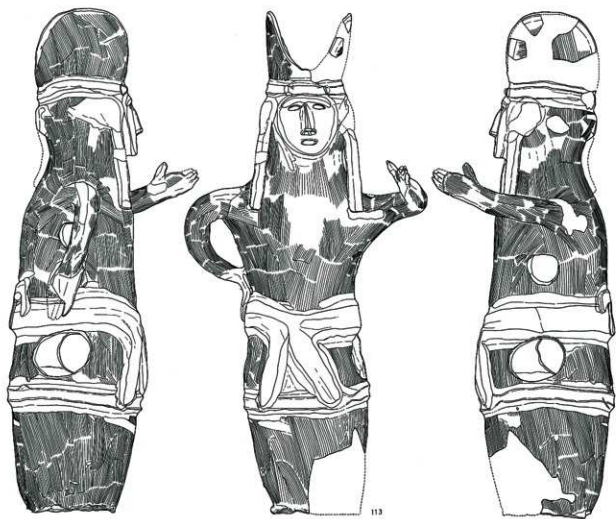
次に、埴輪の出土状況について見ると、ブリッジを起点として、周溝の西側から北側を中心に埴輪の出土

が顕著であった。特にブリッジ左側の墳丘肩部から多量の円筒埴輪の破片が出土した。いずれも周溝覆土の第1・2層中から検出され、浅間B軽石と混在していた。また人物・馬などの形象埴輪も、この位置からまとまって出土しており、ある程度築造時の樹立状況を反映しているものと考えられる。

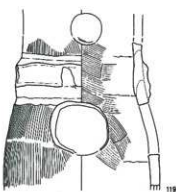
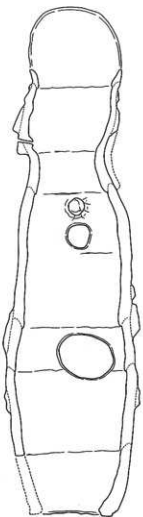
円筒埴輪は、2条突帯3段構成のものが主体を占めているが、54だけが3条突帯になる可能性がある(第171~174図)。属性の違いから大きくA~C類の3つに分類される。さらに、A類は焼成・色調の違いからA1類・A2類に細分できる。

A1類(42・44・46~48・52・53・55~57・59~62・68・69・71・75~77・79・80・83~86・88・89・91・93~94・96・98・100)は、胎土に多量の砂粒を混入し、堅い焼き上がりで、色調はにぶい橙褐色を基調と

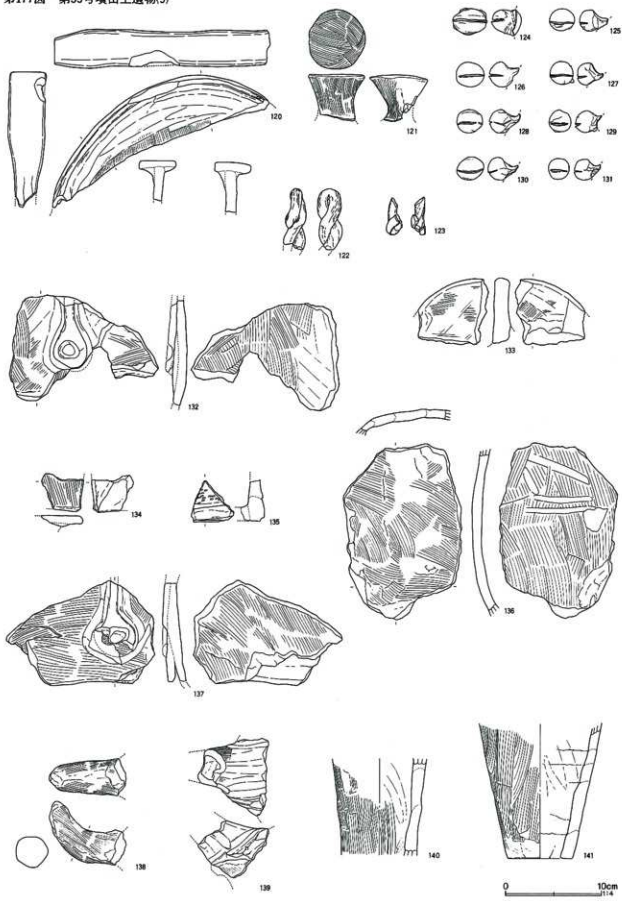
第176図 第35号墳出土遺物(8)



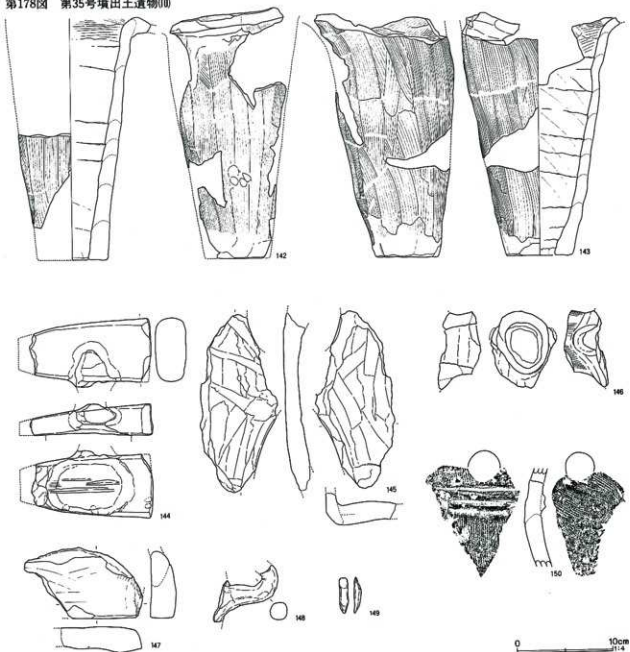
0 10cm
1:4



第177图 第35号出土文物(9)



第178図 第35号墳出土遺物00



するものである。本古墳の円筒埴輪の主体を占める。口径約27.8cm、底径約13.3cm、器高約40cmを測る。各段の高さは、第1段が14cm前後、第2段が12.5cm前後、第3段が13.5cm前後である。形態の特徴は基底部から直線的に開いて立ち上がり、口縁部で緩やかに外反するものが多い。例外として、55のように口縁部が直立し、端部で急に短く外傾する、鈎状口縁のものが見られる。突帯は断面M字形を呈し、横撫でを強く施しているため上辺、下辺とも稜は鋭角的である。透孔

は比較的大きな円形、ないしは楕円形である。ハケ目は幅2cm当たり7本前後と粗いのが特徴である。

A2類(45・49-51・58・63-65・70・74・78・81・82・95・99)は、基本的な特徴はA1類に共通している。ただし、色調が灰褐色を基調とした、いわゆる須恵質のものを指標とした。

B類(54・67・73・87・90・92)は、赤褐色を基調とする。全体の器形は判らないが、比較的細身で、第1段がやや長い。突帯は断面台形と断面M字形がある。

ハケ目は幅2cm当たり14~16本と細かい。

C類(66・97・101)は、量的に少なく客体的な存在である。色調は乳白色を呈し、焼き上がりか柔らかく、胎土には砂粒の混入が少ない。器肉が全体に厚く、ハケ目が細かいのが特徴である。

ヘラ記号は、円筒埴輪A類を中心に確認されている。全体の形の判明するものは少ないが、口縁部外面の透孔の真上か、その付近に描かれたものが多い。ヘラ記号の種類には×印を縦に2つ並べたもの(55)、横方向の弧線を1本描くもの(62)、横方向の弧線を2本描くもの(53・58・61・63・65・68・69・75)、Uの中に横線を2本描くもの(64・74)、Uの中に縦線を1本描くもの(48)、縦線を3本描くもの(54)、不明なもの(44・56・57・60・112)等が認められる。

第175図102~112は朝顔形埴輪の破片である。全体像の判るものはないが、肩部に膨らみをもつもの(106・110)と直線的なもの(107・108)がある。口縁部は大きく外反して開き、端部は水平にのびる。口径は34~36cmである。肩部外面のハケ調整は、突帯の横撫で後に施す。基本的な特徴は円筒埴輪A類に共通する。なお、112の肩部下の外面にはヘラ記号がある。

形象埴輪の種類には、人物・馬等が認められる。第176図113~119に人物埴輪を一括した。113は二又の被り物をつけた男子人物埴輪である。被り物と台部の一部を欠損する。全高66.2cm。二又の被り物の側縁には赤彩が部分的に残る。被り物の下で鉢巻を結び、正面に小さな突起の付いた結び目を表現する。顔の輪郭は倒卵形で、頭部よりも小さく表現されている。あたかも、仮面を付けているようである。顔の表現は全体に丁寧に作られ、鼻は小鼻と鼻穴まで表現されている。顔の両側には棒状の美豆良を下げる。美豆良には当初、織状の赤彩が施されていたようであるが、片側は残りが悪く、図示できなかった。後頭部には後髪の手刺痕が認められる。左腕は前方に差し出され、右手は湾曲し、腰にあてる。腰には幅広の帯が表現され、正面に帯の緒を垂らしている。背面の帯の上には両頭の鎌状のもの、結び紐様のものが表現されている。内外面

共にハケ調整を多用する。

114は男子人物埴輪の顔面である。目・鼻・口等の作りが113とはほぼ同じで、細部まで酷似している。おそらく同一工人の手によって製作されたことを想像させる。両頬には帯状の赤彩が施されている。115は人物埴輪の右腕部分である。大きく湾曲しており、113と同じく腰に手をあてた姿態を表現したものであろう。指先を欠損しているが、残存部の観察では別作りの指を貼付している。残存部は撫で調整を施す。116は後頭部に垂らした後髪が手刺痕したものと考えられる。117・118は二又の被り物の破片である。これにより少なくとも二又の被り物をつけた人物が2体以上存在したことが判明した。119は人物埴輪の胴部から腰部にかけての破片である。

第177・178図120~143は馬形埴輪の破片である。120は断面T字形の立髪部分の破片である。板状の立髪の端部に幅4cm前後の粘土板を貼り付け、接合部の左右に粘土を補い、撫で付けている。板状部分はハケ調整を施し、側縁部は丁寧に撫で調整が施されている。121は立髪先端に付けられた前髪部分である。結束された状態を表し逆円錐形を呈する。上面部径6.2cm、高さ4.9cmである。残存部にはハケ目を施す。122・123は粘土紐を捻り合わせたものである。馬のどの部分に付属する部品であるかは明確でない。123は片面が平坦となっており、貼り付け痕が認められる。124~131は胸繫や尻繫等に付けられた馬鈴である。鈴口を寛ぐ線刻して表す。124は粘土塊を丸めて形作り、基部の周りに粘土を補って本体に装着している。それに対して他の鈴は、基部を指でつまみ出して本体に装着されている。132・137は障泥の破片である。胴部に粘土板を貼り付けて障泥の側縁部を形作り、腹部よりも外側には張り出していない。外面にはハケ調整を施し、粘土紐を貼付して輪鏝を装着する。輪鏝は周縁を丁寧に撫で付けている。136は腹部の破片である。粘土板成形で平坦な板状に作られる。内外面共にハケ目を施す。139は尻尾の付け根の破片である。付け根の下側には粘土紐を貼付して、巻緒を表現している。中空作りで、内面は丁寧に

に指撫てを施す。141～143は脚部の破片である。基部から直線的に膨らみながら立ち上がり、付け根部分では断面楕円形となる。脚の長さは比較的短い。外面調整は指撫てを施した後、基部を除いて縦ハケを施す。内面調整は指撫てを丁寧に施し、粘土紐の巻き上げ痕を撫て消している。141の底面には板目の圧痕が残る。底径は6.7cm前後で、脚の長さは24cm前後である。脚部の成形は、粘土紐の巻き上げによって基本的に形作られているが、143の基部外面に筧による切り込み痕が認められることから、切開再接合法の可能性も考えられる（図版143参照）。

これらの破片はブリッジの北側の埴輪集中部分からまとまって出土し、胎土・焼成・色調等の諸特徴が共通していることから同一個体と考えられる。また断面T字形の立髪や角状の前髪、障泥や輪鏝の写実的な表現、それに短く膨らみのある脚部等の特徴は、馬形埴輪の製作技法としては古い様相をとどめている。

他に別地点から出土した馬形埴輪の破片がある。133は鞍の前輪なし後輪部分の破片である。半円形を呈するものと考えられる。残存部はハケ目を撫て消している。134は鞍の障泥の側縁と考えられ、外面にハケ目を残す。135は鞍の一部である。居木部分には棒状工具を用いた刺突表現が細かく施されている。革製であることを表現しているであろう。138は中実作りの尻尾である。跳ね上がるように上を向いて表現されている。残存部にはハケ目を残す。140は脚部の破片である。径がやや小さいことから馬以外の動物埴輪の可能性もある。これらは出土位置の不明なものや、重複する溝から出土したものが含まれているため本古墳に直接伴うものとは断定できない。

第178図144は大刀形埴輪の把頭部分の破片である。梯台形を呈し、端部を欠損する。残存長12.9cm、最大幅7.7cm、厚さ1.8～3.3cmを測る。勾欠部分は剝離している。下面には把部の剝離した痕跡が残る。周溝北側の第23号溝覆土中から出土した。

第178図145～150は不明形象埴輪を一括した。145は板状の破片で側縁部は上方に立ち上がる。内外面共に

指撫てを施す。動物埴輪の腹部の可能性が高い。146は直径6.3cmの円筒部分の破片である。側面の両側に蹠様の丸い突起が貼付されており、人物埴輪の全身像の脚部の可能性もあるが、断定はできない。粘土紐の巻き上げによって成形される。147は厚さ2.7cmの板状の破片である。残存部には撫てを施す。148は本体部分から剝離しているため明確でないが、大形埴輪の尻尾と考えられる。巻尾を表現したものであろうか。ブリッジ北側出土。149は長さ3.8cmの棒状の部品である。両端部は扁平つまみ出される。113の二又の被り物をつけた人物の下から出土しており、それに付属する部品とも考えられるが、接合はしなかった。150は小円筒をもつ形象埴輪の台部の破片である。

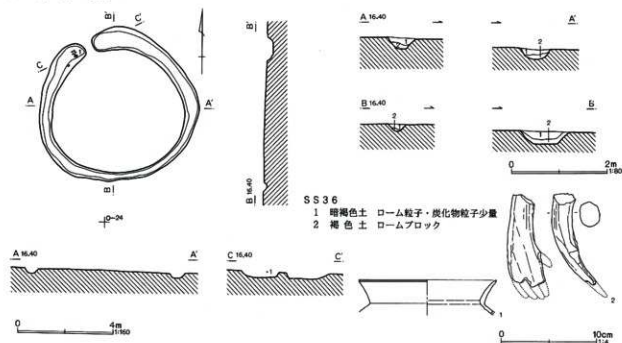
第35号墳は、今回の調査において最大規模を誇る円墳である。周溝からは多数の伊織土器とともに、二又の被り物をつけた人物埴輪を含む多量の埴輪類が検出されており、当古墳群における有力墳のひとつとして位置づけられる。築造時期については、TK47型式に比定される須恵器有蓋高坏が出土していることから5世紀末から6世紀初頭前後の築造と推定される。

第36号墳（第179図）

調査区中央のO-23・24グリッドを中心に位置する。第35号墳と第37号墳の間に挟まれ、第35号墳から南へ3mほど離れている。周溝内径5.6m、周溝外径6.8mを測る小型の円墳で、周溝の北寄りの位置にブリッジを設ける。

墳丘部の平面形態は、東西方向に歪んだ楕円形を呈する。周溝は北側のブリッジ部分が最も幅広く、最大幅1.04mを測り、ブリッジの反対側で最も幅を狭め、最小幅0.32mを測る。断面逆台形て全体に浅く、最も深いブリッジ付近でも0.28mしかない。仮に旧表土から周溝を掘り込んだとしても、予想される掘削土量には限界があり、築造時の墳丘の高さはかなり低いものであったと予想される。ブリッジはN-24°Wを指し、上幅0.36mと小さい。周溝覆土は2層に分かれ、第1層には少量であるが炭化物粒子が混入し、葬送儀礼とのかかわりが示唆される。

第179図 第36号墳



第36号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.5)	(3.7)		A B F	B	褐	30	

遺物は、ブリッジ左側の周溝内から破砕された状態で土師器甕が出土した。小型の古墳からの供献土器の検出例は少なく、貴重な例である。他に墳丘部分の確認面から人物埴輪の右腕部分が出土したが、周囲の古墳からの混入であろう。

第179図1の土師器甕は頸部の屈曲の強い、くの字口縁のものである。2は人物埴輪の右腕部分で、粘土塊を棒状に伸ばして成形された、中実式のものである。指の部分を欠損しているが、おそらく指の表現は小さな粘土塊を一本ずつ付け加えて製作されたのであろう。残存部全体に撫でを加える。

築造時期については、時期を示すような遺物の出土が少なく明確でないが、出土した土師器甕はやや古相を示す。

第37号墳 (第180図)

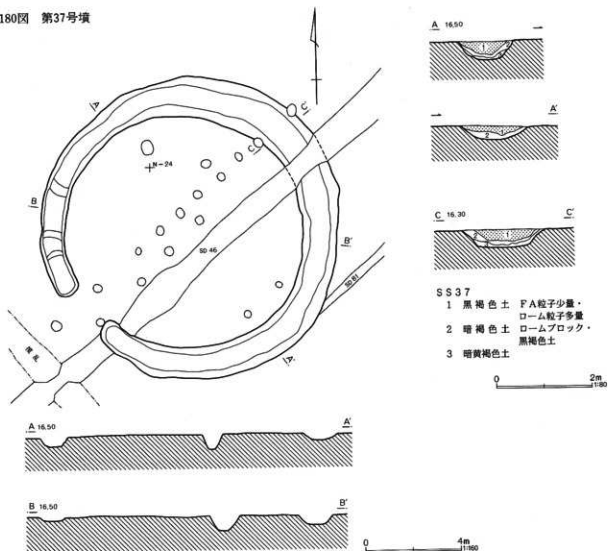
調査区中央部東側のM・N-23・24グリッドを中心に位置する。周溝内径10.16m、周溝外径12.88mを測

る中規模の円墳で、東側には第52号墳が隣接する。墳丘の中央を第46号溝が北東から南西に向かって走り、さらに第7～9号溝列と重複していた。

墳丘部の平面形態は、整った円形を呈する。周溝は南西にブリッジを開口し、西側はやや幅が狭まっていたが、北側から東側にかけては幅を広げている。周溝底面は全体に平坦であるが、西側部分にブリッジ状に地山を掘り残した部分が認められた。周溝幅1.92～0.93mを測り、周溝断面形は逆台形を呈し、深さは0.36mである。ブリッジは地山を幅広く掘り残し、上幅1.84mを測り、主軸方向はN-130°-Wを指す。

周溝覆土は大きく3層に分けられる。最下層には暗黄褐色土が堆積し、その上に墳丘盛土の流入土と考えられる暗褐色土が薄く堆積していた。最上層には少量のFA粒子を混入する黒褐色土がレンズ状に観察され、FA降下以前の築造であることが確認された。なお、図化はしていないが、火山灰 (FA) の分布範囲は

第180図 第37号墳



面的な広がりが認められた。

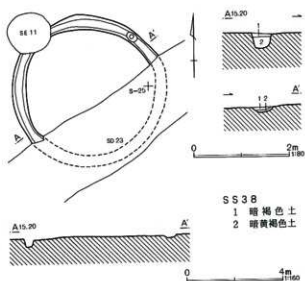
遺物は、周溝内から土師器・埴輪の細片が少量検出されただけである。図化できるものがほとんどなく、築造時期を示す良好な資料に恵まれなかった。

第38号墳（第181図）

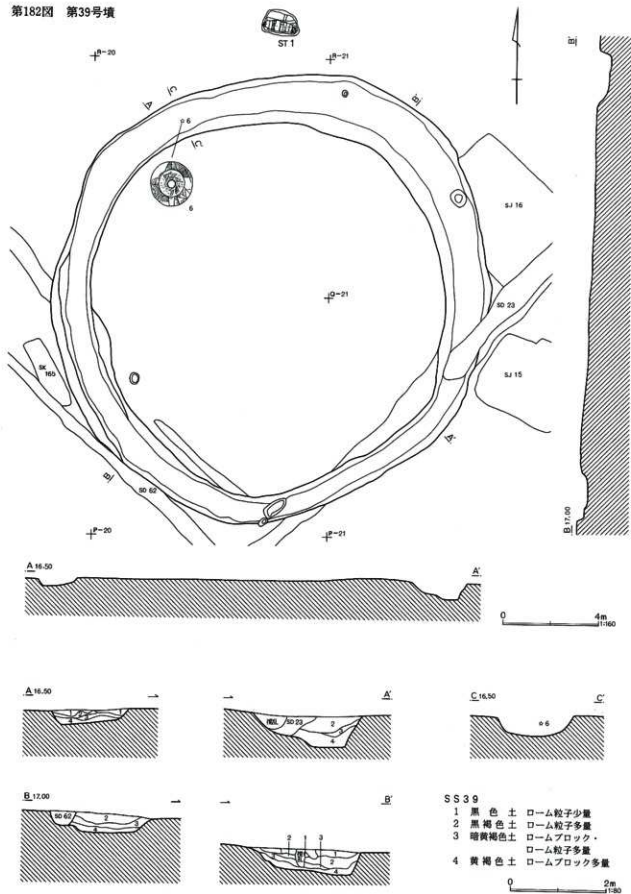
調査区北側の低位面、S-25、T-25・26グリッドに位置し、第26号墳の西側約3mに所在する。第23・39号溝によって墳丘部分が東から南にかけて削平されており、全体の約2分の1を検出したにすぎない。規模は周溝内径約5.56m、周溝外径約6.4m前後の小規模な円墳と推定される。

周溝は北西側に第11号井戸が重複しているため残りは良くないが、幅0.64～0.40m、深さ0.32m前後の幅の狭い溝を巡らしていた。周溝の北東側は掘り込み

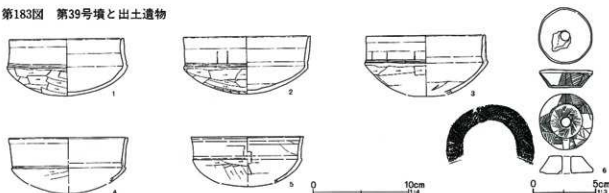
第181図 第38号墳



第182図 第39号墳



第183図 第39号墳と出土遺物



第39号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.0	6.0		BEF	A	橙褐色	60	
2	環	13.3	6.1		BEF	A	橙褐色	70	
3	環	(12.4)	(6.2)		BEF	A	橙褐色	40	
4	環	(12.4)	(4.9)		BEF	A	橙褐色	40	
5	環	(12.0)	4.8		BEF	A	橙褐色	30	
6	紡錘車								外径4.2 孔径0.8 厚さ1.4cm

が浅く、入口部を意図したものと想定される。また北東側の周溝底面にビットが検出されているが、深度が浅く、古墳に伴うものかどうかは明確でない。

遺物はほとんど検出されなかった。

第39号墳 (第182・183図)

調査区中央部西側のP・Q-19・21グリッドを中心に位置する。北東側には第40号墳の周溝張り出し部がせまり、南側には第45号墳が隣接している。周溝内径15.92m、周溝外径19.68mを測る中型の円墳で、北側の周溝外辺に第1号埴輪棺が確認されている。埴輪棺が直接本古墳に伴うかは判然としませんが、周溝外縁から約1.7mしか離れておらず、関連性が窺われる。なお、埴輪棺の概要については次項で詳述する。

周溝の北東側には平安時代の第16号住居跡が重複しているほか、東側には第15号住居跡が隣接していた。また、第23号溝をはじめとする中・近世の溝によって墳丘裾部は大きく削平を受けていた。

墳丘部は既に盛土が削平されており、内部主体を検出することはできなかった。墳丘の平面形態は比較的整った円形を呈し、周溝の全周するタイプである。周溝は東側から南側にかけてやや幅を狭めているが、全

体に幅広く、幅2.64~1.12mを測る。周溝の深さは東側で0.76mを測り、全体に西側が浅く掘り込まれていた。後述するように周溝の北西側からは供獻土器や紡錘車が集中して出土していることを考え合わせると、この付近に入口部が想定される。

周溝覆土は基本的に4層に区分される。最下層にはロームブロックを多量に混入した黄褐色土が堆積しており、この層からの遺物の出土はない。第1~3層は墳丘盛土の流入土に相当するものであろう。また土層断面の観察では火山灰の混入は認められなかった。

遺物は、周溝北西側から線刻を施した紡錘車が溝底面から20cmほど浮いた状態で出土した。また出土位置を特定できなかったが、紡錘車の周辺から1~3の土器器片が破片の状態で見出された。

第183図6は滑石製紡錘車で、外径4.2cm、厚さ1.4cm、孔径0.8cmを測り、重量は31.45g。全体に研磨は丁寧である。側面には細線による線刻文が刻まれている。粗雑に描かれた鋸歯文の中を綾杉文で充填したもので、割り付が乱れ、無文部分が見られる。孔の周囲には放射状の擦線が顕著に残る。

周溝覆土中からは埴輪片がほとんど出土していない

ことから、本来埴輪は樹立されていなかったものと思われる。

出土した模倣環には、口唇部を丸くおさめるものと、面取りしたものが見られ、第35号墳に類似した様相を示している。周溝の土層観察ではFAは確認できなかったが、FA降下以前の築造の可能性が強い。

第40号墳（第184～191図）

調査区中央東寄りのQ-22、R-T-21・23、S-24グリッドを中心に位置する。北西から湧出した埋没谷の中に占地しており、周溝の一部は黒色土を掘り込んで構築されていた。南東に第35号墳が周溝を接するように隣り合い、最も接近した部分では人がかろうじて通れるほどであった。

本墳は、墳丘部は正円形を呈しているが、周溝の平面形態が2か所に張り出し部をもつ不整形を呈する特異な古墳であった。規模は周溝内径18.24m、南北方向における周溝最大幅37.44mを測る大型の円墳である。今回の調査では第35号墳に次いで2番目に大きく、周溝を含めた占地面积は最大である。

重複関係は墳丘部に接するように第58号溝が走行しているほか、南側周溝張り出し部の先端は第23号溝によって壊され、墳丘及び周溝には第53・54号井戸、第156・157・173号土壌等の重複が見られた。

墳丘盛土は既に削平されており、内部主体は確認できなかった。墳丘の平面形態は比較的形の整った円形で、墳丘南西裾を第58号溝によって壊されていた。

周溝は、あらかじめ予定した墳丘盛土の掘削土量を確保するために、南側と北西側に周溝を大きく拡張し、明確な張り出し部を作り出していた。谷地内に占地する地形上の制約もあり、北側から東側にかけては湧水のため、周溝の幅員及び深度を確保できなかったことが一因であろう。また南東側の周溝は、隣接する第35号墳に規制され、周溝の幅を大きく減じていた。

周溝底面は、墳丘裾を取り巻くように一段深く掘り込んだ掘り方が開削され、ロームブロックを多量に混入した暗黄褐色土で埋め戻しが行われていた。同様の造作は第32号墳や第35号墳等でも確認されており、排

水を主な目的とした周溝掘削方法の可能性が高い。

南側周溝張り出し部は、南に向かって矩形に長く張り出し、底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。覆土の状態も底面にFAブロックの堆積が見られるほかは、概ね自然堆積を示している。先端部における幅は4.6mを測る。

これに対し北西側の周溝張り出し部は、南側の張り出し部から直線的に延長した形で広がり、底面に近い位置にFAブロックが検出された。

周溝覆土は、最下層に人為的な埋め戻しと考えられる第10層が堆積し、その上にローム粒子を多量に含む褐色土の第9層を間に挟んで、FAの純層である第8層が薄く堆積していた。

遺物は、周溝覆土内から土師器環、須恵器甕、紡錘車、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・馬）等が出土している。

第187図1～4の土師器環は、模倣環の承審を引くものであるが、3のみ体部と口縁部の境が丸みをもち異質である。4の大型環が伴出している。いずれも周溝覆土中から出土したもので、完形品はない。1は南東側周溝出土。3は南側張り出し部出土。

5は須恵器の甕の口縁部片である。凸縁で区画し内部に櫛描波状文を施す。6・7は同一個体と考えられる。外面平行叩き後、カキ目を施す。内面は同心円文が残る。8は外面に擬椀子叩きを施し、内面は撫でを加える。

9の滑石製紡錘車は、周溝南西側の墳丘寄りの位置から単独で出土した。溝底面に下面を上に向けた状態で置かれ、FAの混入土に直接覆われていた。外径4.8cm、厚さ1.9cm、孔径0.8cm、重量55.52g。色調は乳白色である。

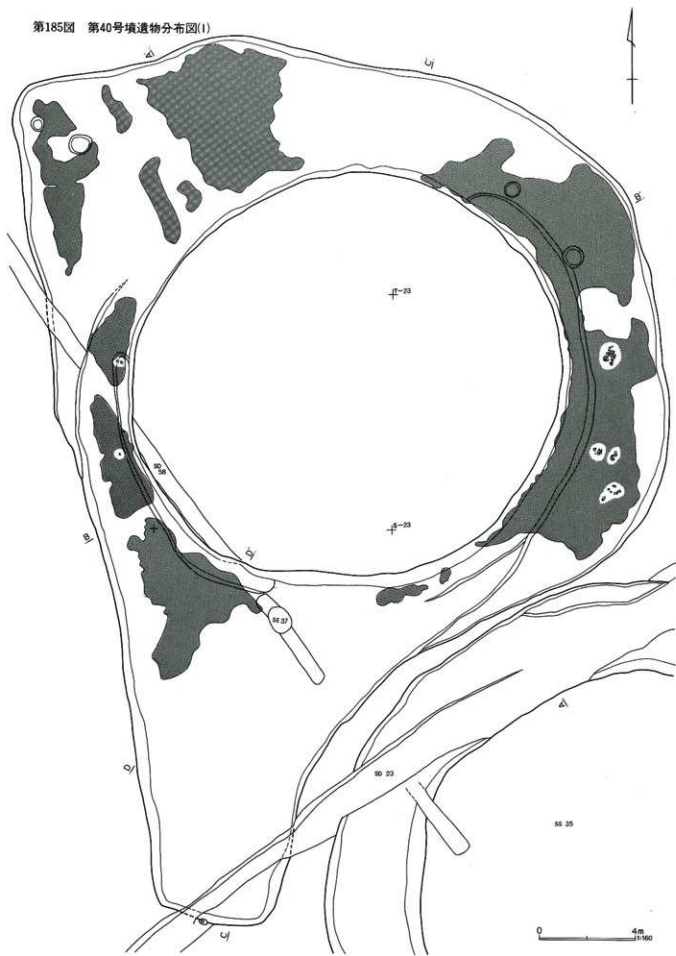
埴輪は原位置を留めるものではなく、すべて周溝覆土の中層から上層にかけて出土した。周溝の北側と東側の2か所に大型の破片の集中が見られた。

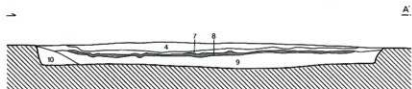
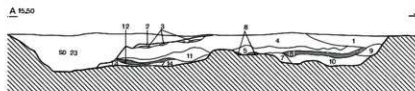
円筒埴輪は、全体の形態が判明するものが1点しかないが、基本的には2条突帯が主体を占めていたものと推定される。大きく3類に分類される。

第184图 第40号墳



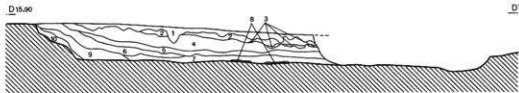
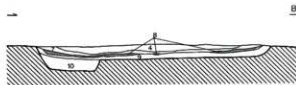
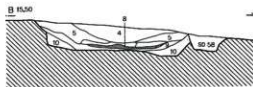
第185図 第40号墳遺物分布図(I)



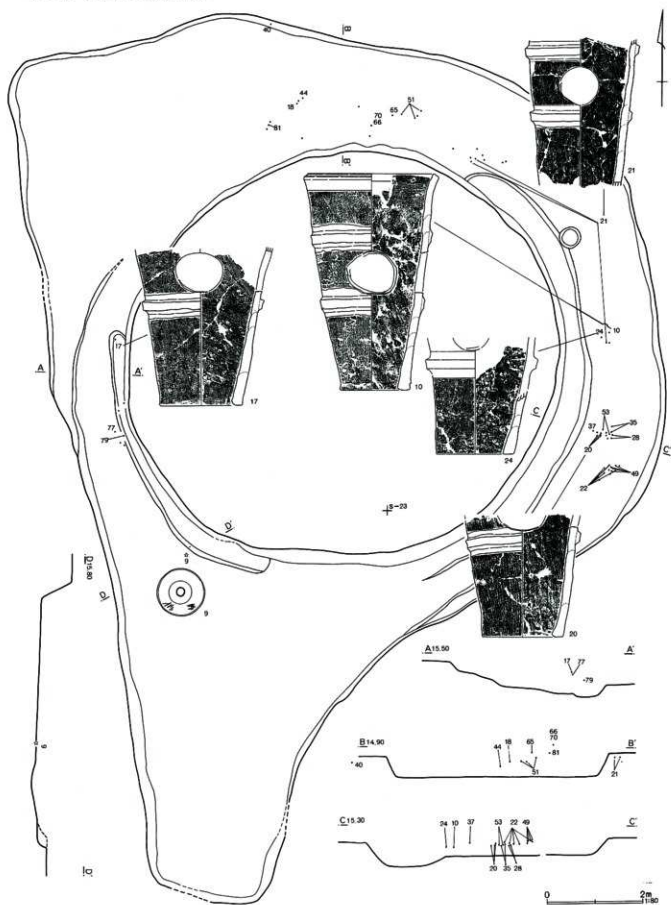


SS 40

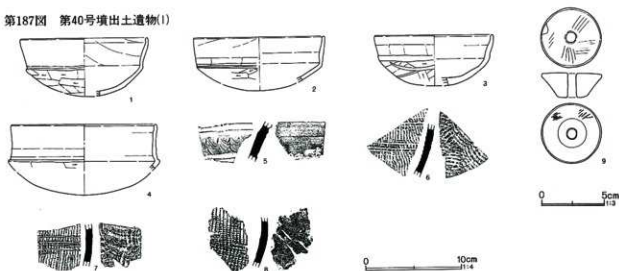
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 3 浅間Bブロック
 - 4 暗黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子
 - 6 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 7 黒褐色土 ロームブロック
 - 8 FAブロック
 - 9 褐色土 ローム粒子多量
 - 10 暗黄褐色土 ロームブロック
- SS 35
- 11 暗黒褐色土 ローム粒子少量
 - 12 暗灰褐色土 FAブロック多量
 - 13 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 14 暗黄褐色土 ロームブロック多量



第186图 第40号墳遺物分布图(2)



第187図 第40号墳出土遺物(1)



第40号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.4	(6.1)		B E F	A	赤褐	50	
2	坏	13.9	4.8		B C F	A	橙褐	40	
3	坏	12.5	5.3		B E F	A	橙褐	30	
4	坏	(15.3)	4.9		B E F	A	橙褐	30	
5	甕				B G	A	青灰		
6	甕				B G	A	灰		
7	甕				B G	A	暗灰		
8	甕				A B	B	灰白		
9	紡錘車								外径4.8 孔径0.8 厚さ1.9cm

A類 (10・18・23・24・30・32・38・41・56・61・64・68) は、淡褐色を基調とし、全体に柔らかい焼きのもので、量的に少ない。10は口径20.8cm、底径11.4cm、器高35.3cmを測る。底部から直線的に開き、口縁部で緩やかに外反する。外面調整は縦ハケで、口縁部外面のみ斜めハケを施す。内面調整は口縁部内面に横ハケ、下半部は指撫でを施す。透孔は円形である。突帯は低台形を呈し、幅広の横撫でを施す。口縁部外面に逆U字形のヘラ記号が認められる。施文位置は透孔から約90°ずれている。

B類 (21・27・29・31・34・36・40・44・45・62・65) は、橙褐色を基調とし、焼成は良好で堅く焼き上がる。量的には全体の約3分の1を占めている。全体像の判るものはない。外面調整縦ハケ、内面調整斜めハケ、ないし指撫で。透孔は円形。突帯は低台形。

C類 (11~16・17・19・20・22・25・26・28・33・35・37・39・42・43・46・48~55・57~60) は、赤褐色を基調とし、胎土には砂粒の混入が顕著である。焼

成は良好で堅く焼き上がる。量的には全体の約3分の2を占める。基底部の破片が多く、全体像の判るものはないが、底部から直線的に開き、口縁部で緩やかに外反する器形と推定される。底径は平均で12.6cm、第1段高は16cm前後とやや長い。外面調整は縦ハケ、内面調整は底部までハケ目を施すものと、指撫でを施すものが見られる。透孔は円形。突帯は低台形、あるいはM字形である。

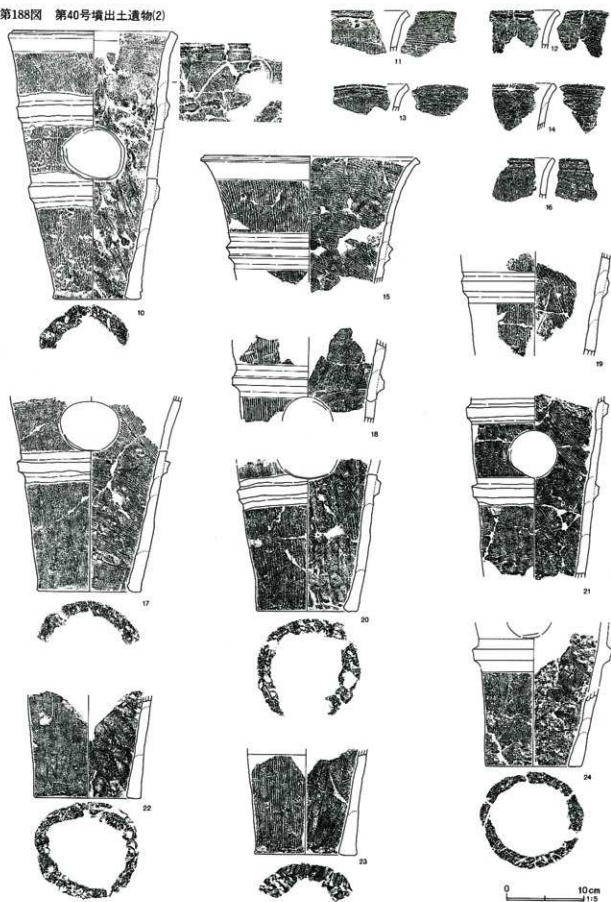
45・48の外面にはヘラ記号の一部が残っているが、その形状は不明である。

第190図66・67・69・70は朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片である。

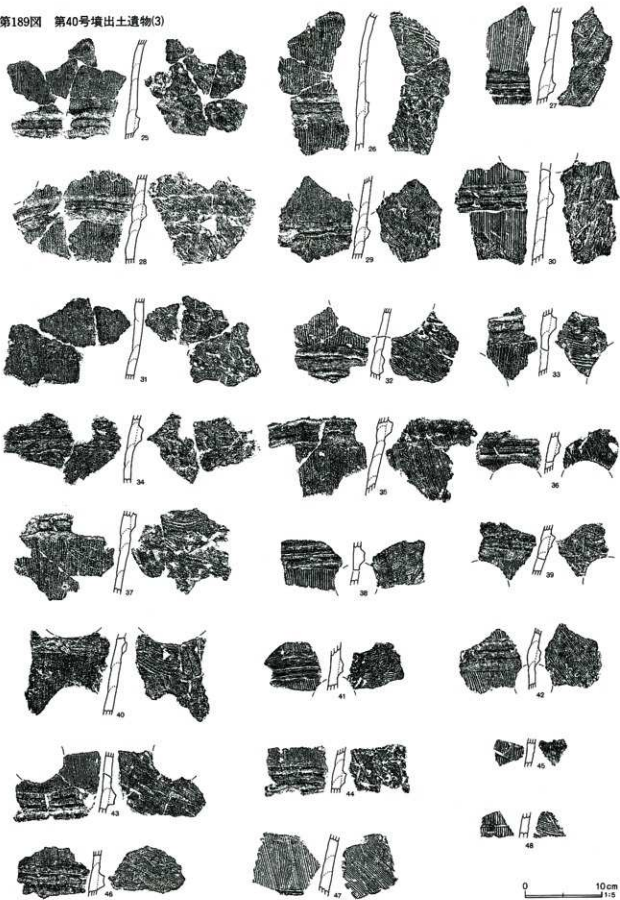
形象埴輪は人物、馬等の破片が僅かに出土している。出土位置も特定できるものが少なく、樹立状況については不明である。

第191図71~79・83は人物埴輪の破片である。71は顔面部分の破片である。鼻と左目及び口の切り込みを残す。残存部の観察によれば顔の輪郭は比較的小さい。

第188图 第40号墳出土遺物(2)

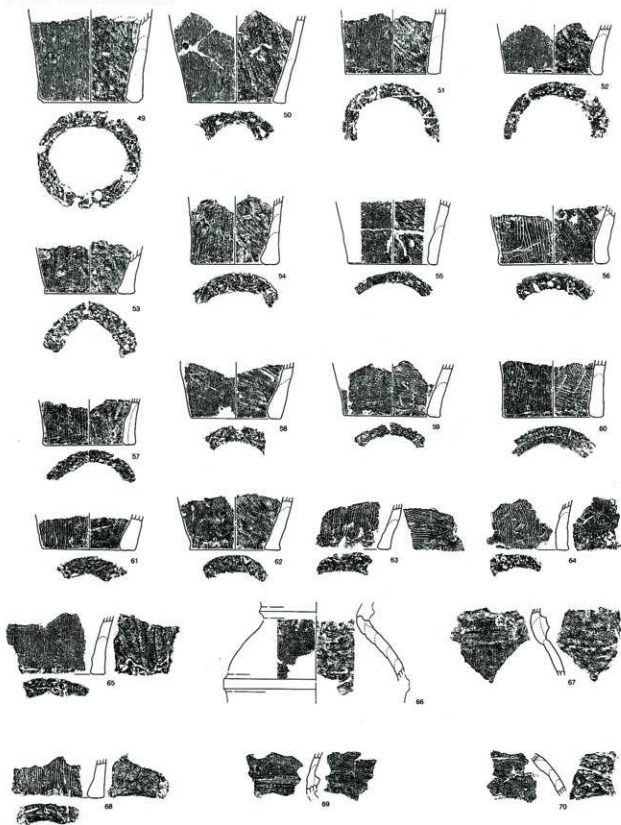


第189图 第40号出土物(3)



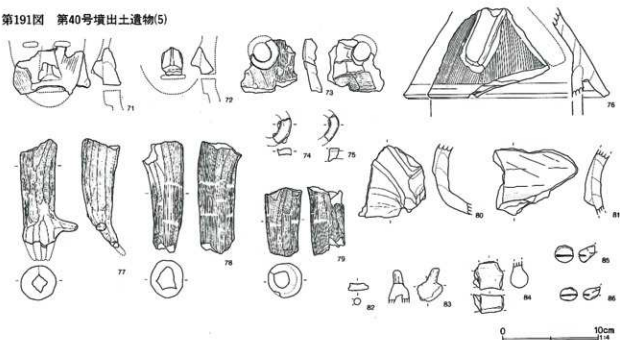
0 10 cm
1:5

第190图 第40号墳出土遺物(4)



0 10cm
1:5

第191図 第40号墳出土遺物(5)



72は鼻から口にかけての小片である。73~75は人物埴輪の耳部の破片である。耳部は円孔の周りに粘土環を貼り付けて表現している。73は左耳の部分で、耳環や耳玉等の貼り付けはない。74・75は耳部の粘土環が剥離したものである。

76は人物埴輪半身像の裾の部分の破片である。円筒部外面に粘土紐を2段に貼り付け、長くのびた上衣の裾を表現している。また正面には腰帯の緒を垂らしている様子を突帯で示している。外面にはハケ目を施し、裾端部は横撫でを丁寧に施す。

77~79・83は人物埴輪の腕部の破片である。粘土板を丸めて、中空に成形したものと考えられる。77は右腕の部分で、四指を欠損し、拇指のみを残す。指の作りは、別作りの指を貼付している。78は左腕であろう。77~79とも外面にはハケ目を施し、掌部分は指撫でを加える。83は右手の拇指の破片である。内面には中空部分が観察される。

80・81・85・86は馬形埴輪の破片である。80は粘土紐を貼付して、革帯を表現する。小片のため部位は明らかでないが、尻繫部分であろうか。81は体部に粘土板を貼り付けて表現した降泥付近の破片である。端部に赤彩を施す。85・86は馬形埴輪に付属する鈴であろう。比較的小型である。

82・84は不明形象埴輪である。82は緩いカーブを描く円棒状の部品。内側に刺離痕が認められる。84は両端部を欠損しており、種類及び部位は不明である。

築造時期については、谷地内に占地していることや周溝のあり方から見て、第35号墳に後続して営まれたものと考えられる。また周溝底面付近にFAが堆積していたことからFAの降下に近い時期であろう。

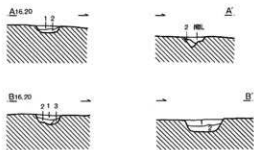
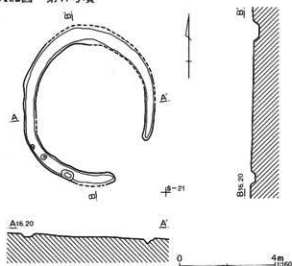
第41号墳 (第192図)

調査区中央部西寄りのS-20グリッドに位置する、周溝内径5.12m、周溝外径6.8mの小型の円墳である。北西側には同規模の小型墳である第42号墳が並列して築造され、南東側には第1号埴輪棺及び第46・162号土壌の3基の無壇丘墓が存在し、古墳群内において特別な区画として意識されていたようである。

墳丘盛土は既に削平され、周溝の一部は後世の攪乱によって壊されていたため、内部主体を確認することはできなかった。墳丘部の平面形態はやや南北に長い楕円形を呈し、南東側に幅広のブリッジを作り出していた。主軸方位は、概ねN-132°-Eを示す。

周溝は全体に幅が狭く、幅0.64~0.32m、深さ0.32mを測り、断面形は箱形を呈する。周溝底面は概ね平坦であるが、ブリッジ左側には3基のピットが検出された。これらのピットが直接古墳に伴うものかどうか

第192図 第41号墳



SS 4 1

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量

は明確でない。

周溝覆土は3層に区分され、概ね自然堆積を示していた。ただし、第1層中に少量ではあるが焼土粒子の混入が確認された点に関しては、葬送儀礼とのかかわりで留意される。

遺物はほとんど検出されず、築造時期については不明である。

第42号墳 (第193図)

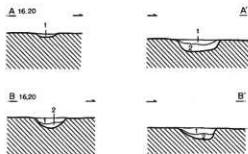
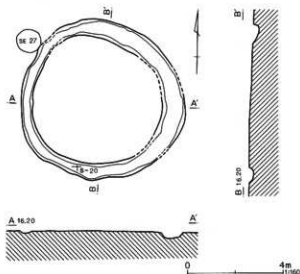
調査区中央西寄りのT-19・20グリッドに位置し、東へ4 mに第41号墳、西へ2.5mに第43号墳がそれぞれ隣接する。周溝内径5.60m、周溝外径7.04mの小型

の円墳で、周溝にブリッジをもたない。地形的には北側の堀込谷面に面した緩斜面肩部に立地している。周溝の北西側で第27号井戸が重複し、また周溝の一部は後世の擾乱によって壊されていた。

墳丘部の平面形態はやや歪んだ円形で、このような直径10mに満たない小型墳の特徴のひとつとして墳丘部平面形態の歪みが大きい点を指摘できる。墳丘盛土は既に削平され、内部主体は検出できなかった。

周溝は全周し、西側で幅をやや狭め、全体に掘り込みが浅く、反対に東側では幅を広げ、掘り込みも深くなっていた。周溝の幅は1.04~0.40m、深さ0.28mで

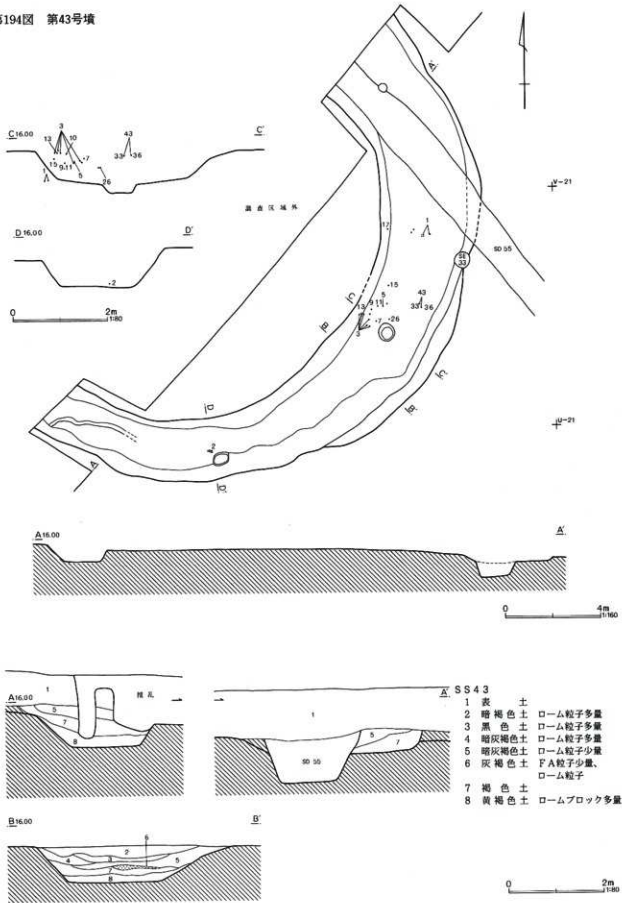
第193図 第42号墳



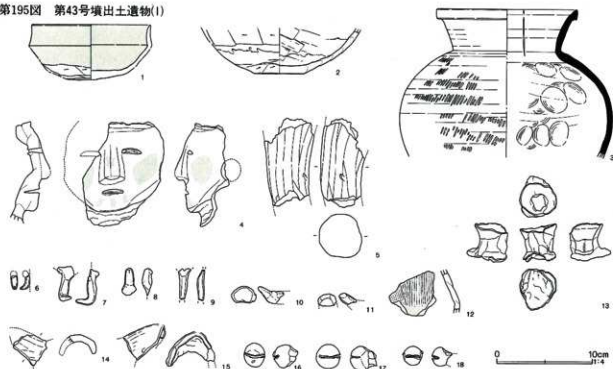
SS 4 2

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック

第194図 第43号墳



第195図 第43号墳出土遺物(1)



第43号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	12.5	5.8		A E F I	A	淡褐色	70	赤彩
2	甕		(4.8)	4.8	A B	A	黒褐色	60	
3	甕	(14.7)	(15.7)		A B G	A	灰	30	

断面形は箱形を呈する。覆土は2層に区分され、概ね自然堆積を示す。

遺物はほとんど検出されず、築造時期については不明である。

第43号墳 (第194~196図)

調査区中央の西際、T・U-19・20グリッドに位置する。北西側は調査区域外にのびているため今回の調査では全体の約2分の1を調査したにすぎない。その後、平成6・7年度に実施されたD区の調査によって南西方向にブリッジをもつ大型の円墳であることが確認されている。

墳丘盛土は既に削平されており、内部主体は確認できなかった。また墳丘北側周溝内を第55号溝が走り、墳丘裾部を壊していた。規模は、周溝内径約16.24m、周溝外径約23.32mと推定される。

周溝は幅4.32~2.24mと全体に幅広く巡らされていた。深さは緩斜面に立地しているため北側が浅く、

南側が深い傾向にあり、最深部で0.78mを測る。周溝断面形は逆台形を呈し、墳丘側の立ち上がりは急傾斜である。周溝底面は概ね平坦であるが、南端部は一段深く掘り込まれていた。また東側と南東側の周溝底面に2基のピットが検出された。覆土の状態などから古墳に伴うものと考えられるが、規模が小さく、掘り込みも浅いため、その性格については不明である。

周溝覆土は土層断面B-B'の観察によれば大きく7層に区分される。最下層にロームブロックを多量に含む黄褐色土が薄く堆積し、その上に褐色土(第7層)の間層を挟んで、FA粒子を少量混入する灰褐色土が堆積していた。周溝内の火山灰の分布は全体に希薄であった。

遺物は周溝覆土中から土師器杯・甕、須恵器甕、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物・馬)等が出土した。

第195図1の杯は、周溝東側の溝底面に置かれた状

態で出土したものである。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が内傾する器形で、模倣環とは異なる系譜のものである。内外面に赤彩を施し、底部は平底に近い。口径12.5cm、器高5.8cmを測る。焼成良好で色調は淡褐色である。胎土には赤色・白色透明・黒色粒子を含み、特徴的に片岩粒を混入している。

2は甕あるいは壺の底部である。周溝南側の溝底面に近い位置から出土した。胴部外面は篋削り後、光沢のある撫でを施している。胎土は白色・白色透明粒子を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色を基調とする。内外面には炭化物の付着が認められ、墓前祭祀における炊爨行為にかかわる痕跡とも考えられる。

3の須恵器甕は、周溝南東側の墳丘寄りから出土した。覆土の上層から中層にかけて分布しており、墳丘部から流れ込んだ状況を示していた。口径14.7cm、残存高15.6cmを測り、薄手で丁寧な作りである。口唇部はつまみ上げて尖らせている。胴部は球形を呈し、外面は彫りの浅い平行叩きを残存部で7段施した後、撫で消している。内面は同心円文の当て具痕を丁寧に撫で消す。口縁部内面には縦位の線刻が認められる。胎土には白色・白色透明・黒色粒子を混入し、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。器形・胎土等の特徴から搬入品と推定される。

埴輪の出土量は全体に少ないが、周溝覆土上層を中心に周溝の東側から北側にかけて比較的多く出土している。とくに、周溝南東側からは形象埴輪がまとまって検出された。

出土した形象埴輪には人物、馬等の破片が認められた(第195図4~18)。

4~6、13は人物埴輪の破片である。4は女子人物埴輪の顔の破片で、右目部分を欠損している。鼻梁、両頬、顎に赤彩を施す。頭部の作りは粘土紐を巻き上げて形作り、顎と輪郭部分に粘土を貼付し、内面から押し出して顔の丸味を作り出している。5は人物埴輪の右腕の破片である。中実作りで、残存部には撫でを施す。6は人物埴輪の頸飾りに付けられた勾玉である。13は女子人物埴輪が母持する壺と推定される。粘土紐

を2段に積み重ね、口縁はつまみ出されたため波打っている。底部の剥離面には左掌の圧痕が残り、1本ずつ粘土塊で作った指のうち1本だけが残っていた。

14~18は馬形埴輪の破片である。14・15は耳の破片で、横断面逆U字形に折り曲げている。残存部には撫でを加える。小片のため作りや頭部との接合方法等は不明である。16~18は馬鈴である。比較的小型の鈴で、粘土塊を丸めて形作り、基部を指で撫で付けて貼付している。鈴口は篋先によって切り込まれている。16は鈴口の切り込みを2回に分けて入れている。17は1回で切り込みを終えている。18は器面に赤彩が一部付着していた。第33号井戸出土。

7~12は小破片のため種類及び部位の判明しない不明形象埴輪である。7は図示した下端をL字に曲げ、上端は剥離している。人物埴輪の頸飾り、あるいは耳飾りの可能性もある。8は拇指の剥離したものであろうか。赤彩が一部付着する。9は棒状のもので、下端を欠損し、上端は剥離している。7と同様、頸飾りあるいは耳飾りの一部であろうか。10・11は同一の形態のもので、鬚の元結の端部の可能性が考えられる。12は外面にハケ目を施し、横位の赤彩が認められる。器肉が全体に薄い作りである。第33号井戸出土。

円筒埴輪は全体を復元できるような資料はなく、各部の破片のみであった。

口縁部は、緩やかに外反するもの(19・22・27・29)と、端部で急に外反し、内面に凹線を巡らすもの(20~25・28)の2形態が認められる。口径は22~24.1cmの幅があり、平均で23.3cmを測る。

突帯は台形ないしはM字形で、突出度は比較的高い。突帯の横撫では丁寧である。透孔は全体の判るものはないが、円形を呈するものと推定される。

底部の良好な資料は少ない。唯一、43は第1段から第2段の透孔の下端までが残り、直線的に開く形態であることが判る。底径15.6cm、第1段高17cm前後を測り、他に比べるとやや大型であることから朝顔形埴輪の底部の可能性も残されている。50は底径12.8cmを測り、43に比べ一回り小さい。53・54の底部破片を含

第196图 第43号墳出土遺物(2)

